海潮急激

海潮急激なれば、順潮にあらずむば舟行頗る艱む、續西遊記に云へり、『安藝國穩戸の瀨戸と云ふ海あり、此は島山の陸地に連るところ甚だ細ければ、その山を穿ち切通し、舟の通ふ海路を新たに造りしなり、人力を以て切上げたりし事なれば、西方の岸迫り居て、其間の潮行甚だ急、常に舟人の恐るる所なり。

平清盛

昔平清盛安藝守にて、此の國に居給ふ時、舟にて毎度往來に此處に至り、出崎の山に支へられ、遙かに南の方へ廻りて、十里餘も海路遠くなれば、此處を通り給ふ毎に怒りて、此の出崎の山を切通し、舟を眞直にやるべしと下知し給ふ、又皆此の事人力の及ぶところに非ずと恐れしかども、清盛の下知止めがたく、數萬人の力を以て、直に陸地に連る所を斷切して、舟の通ふ海を造りなせり。

兵庫の築島

その後は、數百年の後も其の恩を蒙りて、舟路近く往くことを得るなりとぞ、予兵庫の築島を見て、清盛の志の大にして、豪邁なることを感じ驚きしが、また此の事を聞きて、一世に威を振ひ給ひしも、其の故なきにあらざりしと、其の世のことまでも思ひやりし』云々。

無數の青螺

思ひ立ちては何事も成さで止むまじき清盛の面目は、躍如としてこゝにも現はれ居るを見るにあらずや、かくて吾等は、晝よりも猶美しき海面に、靜かに煤煙を靉かせつゝ、猶も西へ西へと進みぬ、艦首に切る波の花雪よりも白く、しかも見渡す海面には一波あがらず、靜かなることさながら眠れるが如し。中國の山々は、笑みを湛えて送迎し、無數の青螺出でゝは隱れ、隱れては又出づ、船は其の間を縫ひ行きて、時の間に光景の移り變れるに、吾等はいつまでも上甲板に立ちて、飽かず眺めぬ、いつ迄も飽かず眺めぬ。

第三十五圖　はなれ小島

曩の程より艦尾に近く、吾等を送り來れる鷗は、猶翼の疲れを知らざるものゝ如く、何處までも吾等を追ひ來りぬ、島も綠、海も綠の色濃き所、鷗の白き翼を交へて、天地一入鮮明に、初夏の薫風を受けて、海も陸地も、皆一樣に陸離たる光彩を放てり。

光彩陸離

同じ海ながら、靜かなれば一波起らず、怒れば萬噸の巨艦をも覆沒せしめされば、止まず、嗚呼彼も亦外面如菩薩、內心如夜叉の類か、否海は吾等が友なるものを、いかでさる影暗きことのあるべきや。

英雄の心

海は英雄の心を藏す、見よ風伯雨師を伴ひ來りて、激しく鬪爭を挑めば、萬丈の巨濤を以て之を迎ふれども、空はれ風絕えては、再び元の靜平に歸して、一波亦驕らず浮鷗の夢いつまでも圓かなるが如く、英雄豪傑の心緖三歲の童子も亦親しむものを、あゝ我が友海は、度量の大なる他に何物も比すべきなけむ。吾等は海の動靜二つながら之を愛す。

海の動と靜

第二十九節　海上の合唱

總員軍歌

船は瀨戸內海の靜かなる波路を分けて、九州有明灣の錨地に向へり、日は靜かに暮れて、滿天の星華例によりて咲き競はむとす、軍事點檢後『總員軍歌』の命あり、疾驅上甲板後部に出でゝ人々と共に之を歌ふ、歌は軍人の精神及び軍艦マーチの二種、試みに之を揭げて、更に諸君が高唱に便せむ。

軍人の精神

軍人の精神

軍人たるの本分は、　心は忠に氣は勇み、
義は山よりも猶重く、　死をば輕しと心せよ、
又も禮義を愼みて、　上を敬ひ上よりは、
下を愛して一筋に、　和解を旨と心せよ、
武勇は古來我國の、　譽れぞ力め勵めかし、
されど粗暴を愼みて、　膽力練りてよく計れ、
信義の厚きは軍人の、　花にしあれば後先を、
深く考へかりそめに、　事を計りて吳々も、
驕奢に流れ輕薄に、　奔るは兵の弱き基、

常に質素を旨として、　慾と華美とに遠ざかれ、
この五ヶ條は天の道、　人の道なり魂ぞ、
畏み守れと大御言、　いそしみ守れ我武夫。

軍艦マーチ

軍艦マーチ

守るも攻むるも鐵の、　浮べる城ぞ頼みなる。
浮べる其の城日の本の、　御國の四方を守るべし、
眞金の其の船日の本に、　仇なす國を攻よかし、
石炭の烟は綿津見の、　龍かとばかり靡くなり、
彈丸打つ響は雷の、　聲かとばかりどよむなり、
萬里の波濤を乘越えて、　御國の光を輝かせ。

天外無心の星辰

二曲共に其の歌詞麗はしからず、餘韻頗る乏しきに似たれど、軍人の精神を謠ひ盡して遺憾なく、しかも之を大洋上に大聲呼號して謠ふ時は、漂渺として雲に入り、水に傳へ、天外無心の星辰さへ、宛然笑を含みて傾聽するにやと思はるゝなり。

コーラス

波は輕くひた〳〵と舷側を打ちて、小さき萬千の銀珠を散らし、汽罐の運轉と、推進機の怒號とは、壯夫のコーラスと相和して、端なくもこゝに自然の大オーケストラを現じ來る、歌ふ人の耳には、其の聲のすべてが、正にわれのみ一人の口より迸り出づるやと疑はるゝばかり、曲の進むにつれて、聲いよいよ大に、氣まず〳〵昂し、あゝ何ぞ其の光景の雄偉なるや。

天地再び寂寞

見上ぐる空には明星の、光り今宵は今更に鮮かに、彼等も亦下界の興をや助くらむ、日全く暮れ果てゝ、四面たゞ茫々、聞く人もなき洋上の歌曲も、やがて全く收れば、天地再び寂寞として、波を切る響のみ強く〳〵吾等が耳を打ち來る、船頭何ぞ堪えむ今夜の情、吾等が感慨亦此の一語に盡きたり。

孤燈明滅

『總員別れ』の號令の下りし後は、吾等は上甲板の鐵柵に寄りて、靜かなる夜の海を見渡し、俯して暫く永遠を思ひぬ、島と島との間を逢ひ行けば、孤燈明滅して、林樹に隱れ又忽ちにして見ゆ、友よぶ漁夫の舟にやあらむ、遠く悲しき聲さへ絶え〳〵に波間を傳ふ。

當方面の右舷にありては、內地の陸地に連れるものあり、其の一方には、正

しく東京下關間を往返すべき列車の、轟々たる車輪の音高く奔馳し居る筈なり、故に若し晝間ならば、せめては其のあたりを想像して、故郷への思ひを傳へむものを、今は四顧唯暗黑の魔界を迷ひ歩くにも似て、しかも時々刻々、夜凉の身に染むを覺ゆれば、久しく佇立せむも、却つて害あらむかと慮り、再び我が次室に歸り來りぬ、折しもあれバス當番より、入浴の報告に接す、これ幸なりいざ一浴を試みて、日中の塵垢を一洗し去らむか。

バス當番

第三十節　浴室の感想

浴槽の裝置

本艦士官の浴室は、吾等が寢所の近傍にありて、士官浴室、士官次室浴室と、相隣接して設けらる、艦長浴室其の他は別所にあり、浴槽は洋式の金屬製盥にして、之に潮水を充たし、パイプによりて蒸汽を導くが故に、民間の夫れの如く、大なる手數もかゝらず、極めて簡便にして、温熱亦宜しきを得るなり。

元より海水温浴なりとは云へ、毎夜必ず缺かさず行はるゝが故に、吾等は陸上にありし時に比して、著しく身體の清潔を保ち得べき筈なるに實は淡水の湯とは大いに其の趣を異にし、殆ど石鹼の功力なきを以て、充分に垢を流すことは、稍々困難なるものゝ如し。

石鹼の効力

第三十六圖　浴槽の人

浴場の用意出來上るや、當日のバス當番たる次室のボーイは、其旨直ちに通じ來る、曰く『何々中尉バス宜し』と、若し此の時指名したる中尉が、所要ありて入浴出來ざる時は、當番は、又『何々少尉バス宜し』と問ふ、少尉は事務の手を休めて『いざバスるべし諸君お先に失敬！』と下甲板なる浴室に走る也。

バス當番のボーイは一々の入浴者に對して親切丁寧を極め、或は被服の整頓をなし、或は浴槽の温熱を加減し、更に背を流す等、用意の周到なる、よく家庭的主從の美點を發揮して餘

被服の整頓

無念無想

れるなし。

吾等は此の浴槽に、體を仰向けて、心地よきまゝに、暫く無念無想の境に入るを常とす、士官等の所謂バスるてふ眞の意義は、彼等に取りては、終日の塵埃を洗ひ流すも、亦其の主要なる目的には相違なけれど、身を浴槽に横へて、廣き宇宙を思ふ刹那こそ、卽ち最も愉快の時と云はざるべからず、起床後より今まで休むる隙なかりし身を、はじめて吾に返りし如く覺えて、衷心の微笑禁ずべくもあらざるなり。

衷心の微笑

無上の安息境

蓋し彼等のすべては其の一日を上甲板に走り、艦橋に立ち盡し、或は空氣の交通極めて少き下甲板に介在して、五體を安むる時だになく、激しき活動を試み、終日勤勞を敢てしたる身なれば、夜の入浴時ばかり樂しきはなからむ、あゝ眞にバスこそは無上の安息境と云ふべからむ。

よし汚塵を流し盡さずとも、思ひのまゝに四肢を延べて、溫水中に身を任せし刹那は、正に天國に逍遙するにも似て、恍として吾あるを忘れしむ。

本艦の浴室は、恰も左舷々梯と、鐵壁を隔てゝ相接すれば、碇泊中の如きは

定期汽艇の出入

定期汽艇の出入毎に、けたゝましき人の聲音を耳にし、やゝ五月蠅き感なきにあらざれども、航海中殊に波濤高く響きて、唯一の舷窓を襲ふ時、身は搖籃中にあるものゝ如く、云ひ知れぬ愉快と共に、眠を催す事も屢々あり。

吾等はこゝに、明ら樣に白狀せざるべからざる一事あり、最初乘艦前に際して、多年海上生活に馴れたる斯界の先輩を訪ひ、其の苦樂の點の、果して那邊にありやと問ひ試みたるに、該先輩者の答へに曰く、由來海上の生活は、陸上の夫れに比して、著しく趣を異にするものなるが故に、乘艦當分の間は、種種の不自由と缺乏とを訴へて止まざるべく、食物も寢所も、日々の課業も、全然不馴の事なれば、乘艦後は專ら其の用心然るべしとの事なりき。

板子一枚下

又海事に暗き我が父老等は、皆眉を顰めて憂ひ顏に云へり、古來板子一枚下は地獄とさへ云ひ傳ふるものを、船に乘るからには、何時暴風雨其の他の變災の爲めに、一命を棄つる如き目に遭ふやも知れざれば、強いて止めむとはせざれども、心して危險の地を避くる樣にせよ、若氣に任せて冒險を事とする勿れと、蓋し現時の造船術の進歩や、航海學の進歩を夢にも知らぬ老人

造船術

自然の偉力

海上旅行の危虞

の繰言としては、さもあるべしと思ひ、吾等も謹むで其の意を領し置けり。

然るに乘艦後の衞生狀態は、頗る可良にして、最初の一二夜こそは心苦しかりし吊床も、後には陸上の夜具に比して、却て寢心地よき迄に到り、荒天に際して艦のガブりし事も、一再に止まらざりしが、夫れにも何等精神上、肉體上共に、打擊を受くることなく、よく自然の偉力に抵抗するを得たりしかば、其の當初の取越苦勞が、全く杞憂に過ぎざりし事を思ひ、衷心大いに愉快を感ぜざるを得ざりき。

吾等は斯くの如くにして、既に早くも海上生活に馴れたりとするは、元より早計の誘りを免れざるべし、さりながら一般世人が、何等の經驗なくして、一意海上の旅行に危虞の念を抱く如きは、全く謂れなき事なれば、吾等は將來勉めて、其の蒙を啓くことに、心掛けざるべからずと思へり。

終日の塵埃を洗ひ流して、精神意氣頓に爽然たるものあり、出て次室に歸り來て、一杯の澁茶を乞うて咽を濕せば、舷窓より吹き込む風は、常よりも更に清らかに、滿身の汗を奪ひ去りて、氣は斗牛を貫かずむば止まざらむとす、

低回顧望

豐後水道

第三十七圖　ハンドレード

即ち走つて上甲板に立ち、天地の光景を俯仰すれば、美なる哉滿天の星斗冴え返りて、海波漾々無限の歌曲を奏し、羽衣を着て空際に翔るが如く、茫々たる大洋の水を友として、低回顧望之を久しうするに、清興はいつまでも盡くる所を知らず、宛として夢路をたどるものに似たり、

第三十一節　有明灣の風光

風光の明媚他に類ひなき瀬戸内を出でて、正に豐後水道にさしかゝりし頃より稍波の高きを感ぜしかど元より荒天のためにはあらず、靜かなること盆池の如き、瀬戸内を航過する時に比して、聊か波浪の高低

小さき變動

心にもなき不覺

を來たせしに過ぎざるなり。

蓋し人も、永く平和に馴れては、小さき變動に際するだに、猶且つ氣慮して驚怖の心を抑ゆべからざる事あり、常に大海洋を通航して、波濤に掀飜されつゝ、而も何等意とせざりし吾等が、一時平穩の海に馴れて、心にもなき不覺を取らむとせしは、げに笑止の沙汰と云はざるべからず。

かくて艦は、日向の陸地を右舷に見て、藍碧の波上を横ぎり、都井岬を迂回して有明灣の錨地に入る、此の日初夏の天いよ〳〵清く澄み渡りて、甲板上に出で立てば、遙かに南溟より送り來れる熱風のために、今さら盛暑の近づかむことを覺えぬ。

觸目の天地

さるにても吾等は、東海岸より瀬戸内海に入り、更に九州の沿岸を周航して、今や漸く此地に來れり、到る所觸目の天地悉く新事實にあらざるはなく、隨つて見聞を廣めしもの頗る多く、更に活きたる教訓を得しことも甚大に、痩せ凋みし旅鞄は、かくの如くにして日を經て益々膨脹せるなり。

抑も有明灣は、我が海軍の理想的錨地にして、内海巡航の艦隊は必ずこゝ

火崎と都井岬

に寄泊することゝなり居れりと云ふ、灣は大隅の火崎と、日向の都井岬とに圍まれ、水深く波靜かに、對岸志布志の町の後方には、群巒相連り、遙かに霧島山の噴烟を望む所、風光最も佳麗にして、彼の東海の清水港にも劣らざるものあり。

檳榔島

殊に前者に三保の松原ありて、更に一段の好景を添ゆるが如く、後者には灣口に近く檳榔島の峙つものありて、景中更に景を加ふ、曩に三保に遊びたる吾等の、いかで此の島に負くを得むや、一日少閑を得、同室の士官等と共に、橈艇を飛ばして、檳榔島の探征を企つるに至れり。

蓬萊か高砂か

茂林の翠色滴るばかり、未だ鳴鹿の跡を印せざれども、清快最も掬するに堪えたり、遠く艦上より之を望めば、蓬萊の島か高砂の仙島かと疑はるゝばかり、不幸にして吾等は未だ現今の地理書中に、蓬萊仙島の所在を見出すを得ずと雖も、古來稱する所のものは、或は之なるべきか、元より無人の孤島とは聞けど、亦吾等が來訪を歡び迎ふべき、不遇の生物なきにあらざらむ。

已にして左舷々梯を發せる橈艇は、初夏の微風を受けて、オールに浪の花

を散らせつゝ勢ひ鋭く漕ぎ出せり、櫂もつ勇士の面上には、玉なす汗と潮の烟と相和して、歩一歩漸次本艦を遠ざかるにつれて、其の色いよ〳〵鮮か也。

一幅の大活畫

淵知れぬ碧綠の海を走ること十數分、顧みれば後方の艦隊は宛然玩具の船の如く小さくなりて、吾等が眼底に映じ來り、更に其の背景たる嚮嘆郡一帶の山林村落は、恰も一幅の大活畫を展けるが如く、霧島の高峯は漸くその中腹を現して、雄姿堂々、神嚴の氣犯すべからざるものあり。

首を回して前面を見渡せば、鬱然たる密林は、宛然藍碧の海より生れ出でけむものゝ如く、樹容草色、悉く雙眸に入り、岳麓の巉岩は怒濤を嚙み、烟霧を噴きて、容易に近づくべからず。

火山の噴出物

茲に於てか水夫等は、先づ艇の安定を保つことに努め、かねて携へ來れる板橋をば、艇と岩壁との間に架設したり、仍て吾等は兵員に導かれて此の危橋を渡りつゝ上陸すべきことゝなれり、打ち見れば海濱一帶には、霧島火山の噴出物たる燒石の、水に曝されて、白銀の色を放てるもの、點々として散在し、巨岩には頑强なる藤壺の類の、麕集して波濤に掀飜されつゝ、猶其の生活を持續するを見る、之を外にしては、怒濤あまりにはげしければにや、常に海濱に見る如き貝螺の族は、殆と一も之を認むべからず。

危き板橋に幾度か肝を冷して、辛うじて渡る。水深きにあらざれば、よし墜落すればとて溺死の憂ひは殆どなしと思へど、たけり狂ふ潮の勢ひを見れば、四肢亦震ふも是非なしや、君よ弱き人よと笑ふを止めよ、吾等は尙前途を有するものを、海濱の波間に落ちて、醜態を演ずるを屑しとせざるなり。

自然の斧鉞

自然が斧鉞をもて、無遠慮に刻まれし島山は、蠢々として猥りに人の子の攀登を許さゞるものゝ如く、綠樹天日を被ふて、晝尙陰暗く、鬼氣自ら肌に迫り來る、しばらく海濱の巨岩に踞して、來し方を顧れば、正に之名工の苦心に成りし大畫幀にも似て、漂渺たる趣まことに掬するに堪えたり。

毒蛇害蟲

いざ、道なき路を踏み分けて、島山の絕頂をや極めむと、共に踴躍して進む見馴れぬ草は深く地を被うて其の丈人の腰にまで及ぶ、毒蛇害蟲の類も人間の氣息を嗅ぎつけて、私かに利劒をや磨くらむ、されど吾等は、既に氣大洋を吐呑す、須彌山中の一芥子に等しき此の孤島に、何者の禍かあるべきと、荆

一鳥飛ばす

風蘭の花

暖流の衝路

垂涎三尺

棘を分け巉岩を擧ぢて、辛うじて其所に一路を求め得たり。

幽暗の境に入りて、宛然太古の觀ある森林には、一鳥飛ばず鳴かず、丁々たる檳榔の巨幹は年經て自ら倒るれども、而も千歳斧鉞のひゞきを知らず顏に、古苔蒸し盡せる木々の枝條には、風蘭の花美しく咲きこぼれて、終古人に其の香を知られず、咲きては散り、散りては亦咲き、岩壁の巨巖に打ち寄する波と、共に不變の事業を繰り返すなり。

由來此の檳榔島は、南洋地方より流れ來れる暖流の衝路に當れるが故に、潮と共に寄する草木の果實種子の類は、何れもこゝに打ち上げられて、遂に今見る如き、翁鬱たる森林を育成したるものゝ如し。

されば吾等が眼に入るもの、すべて珍種の植物ならざるはなく、胴籃を携へ來りて、思ひの儘に採集し得たらむには、同好の友をして、垂涎三尺ならしめむものを、返す〳〵も惜しき事したりとて、今更の如く臍を噛むの外なかりき。

嗚呼さるにても此の島に茂り合へる熱帶の草木類よ、遠く波に乘つて母

黑潮の音づれ

千俣の那落

ザアナの副長

國を離れ、こゝに漂着して芽を開き、枝を伸して、亭々として繁茂すれども、寄せ來る黑潮の音づれを聞かば、非情の草木と雖も、猶且つ南洋の故郷をや戀ふらむ。夜々の夢の、高く鳴る潮の響にや破るらむ。

吾等は漸く島の頂上にまで達せしが、僅かに馬背に等しき一路を辿れるのみ、左右共に巉岩絶壁の、足一歩を踏み誤れば、忽ち千俣の那落に墜落せむとするに、慄然として五體の寒さを感じ、再び舊路を經て、漸く艇中の人となる事を得たり。

第三十二節　黃海々戰（上）

海上生活の挿話（エピソード）として、茲に明治二十七年八月十日に於ける、黃海々戰の趣味ある物語を記述するも、亦一興なるべしと思ふ、當時露國の巡洋艦ヂアナにありて、副長の重職を執りたるセメヨーノフ中佐は、此の海戰に就きて、最も犀利なる眼光の下に、詳細記述する所あり、敵軍中の人の眼より見たる海戰の記錄は、元より我が軍の行動に關して、多少の誤謬あるを免れずと雖

旅順港外哨艦

最高速力

合戰準備

も、敵其の物の模樣は、却つて吾の知らむと欲する所、亦他山の石にはあらじと思はる。以下記す一條は實に同中佐の筆錄を元とせるものなり。

八月十日天未だ明けず、東方微茫の間に、漸く紅潮の漲り來るを認むるの時、わが艦隊は相率ゐて旅順港外に出で、機を見て浦鹽斯德に逸出せむとせり、之より先我がヂャナは、哨艦として所定の場所に、特別任務に服したりしが、全艦隊が悉く港外に出でたる後を以て、はじめて運動を開始し、其の後尾に附して汽力を加へたり。

此の日天色清麗、盛暑の輕風徐ろに吹き、海上一波起らず、曉靄未だ全く晴れやらず、水天糢糊たる東海に當りて、敵の敷島・春日・日進等の主戰艦隊を認む、亦舊式巡洋艦の一枝隊たる、松島・嚴島・橋立等が、最高速力を以て、東北方に航過するもあり、之等の勇しき光景は、皆吾等が双眸に集り來り、爲めに衆皆心の躍るを覺えざるを得ざりき。

八時五十分旗艦ツェザレヰッチの檣頭に飜へる信號旗は『合戰準備をなせ！』と云ふにあり、而して更に『皇帝陛下が吾等に對して、浦鹽斯德に赴くべ

撃縱陣

山容水態

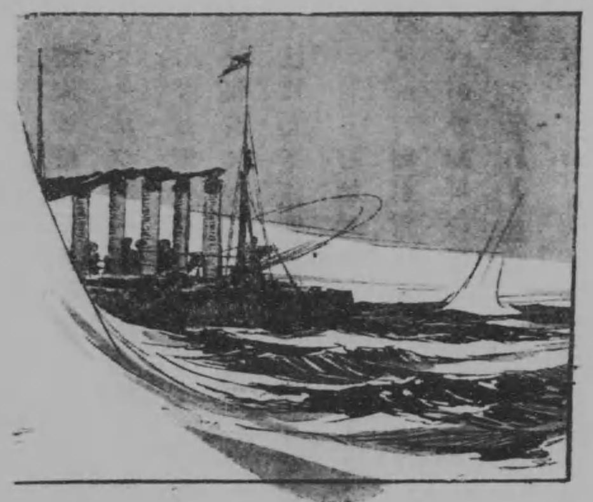
しと命ぜられたりとの報導に接す』との旗信を掲ぐ。

艦隊は雄姿堂々、戰鬪陣形を以て進行せり、卽ち戰鬪艦隊の前方には、ノヴイック及び第一驅逐隊先陣を承り、之に亞で巡洋戰隊相控へ、何れも單縱陣をなす、風颯々煤煙濛々として、空際一面を罩め、滿艦の勇士踴躍して機を待つ、壯觀實に言語に絕せり。

已にして旗艦は原速八節の信號を掲げぬ、謂ふに汽機に故障を生じたるものならむ、嗚呼さるにても何事ぞや、彼等は敵前に曝露して、其の封鎖を突破すべく、强行軍の眞最中なるものを、八節の速力とは何事ぞ、駑馬の足を以て、いかで獅子の追究を免れ得べき、吾等は憤慨のあまり、切齒之を久しうするの外なかりき

併しながら天は吾等の頭上に幸を下し給へり、見よ旅順の水容山態は、今や薄絹の如き淡霧に被はれて、黃金山も老銕山も、明かに認むるに由なけれど、吾等が前路は意外にも清く澄み渡りて、展望意の如くなれるを、わゝ先に吾等がために、掃海の任務を全うしたるオトワズヌイと驅逐隊の若其よ、彼

等は永く旅順の重圍に介在して、猶奮鬪を繼續せむとするか、願くば健全にして、勇しく祖國のために盡せ、吾等も亦浦鹽に行きて、目出度き再擧を圖らむものを。



第三十八圖

日本軍の活動開始

十一時半を過ぐる頃、艦隊は速力を增して十節となせり、されど亦直に旗艦は『操縱意の如くならず』との、悲しむべき信號を揭げぬ、仍て全艦隊は餘義なく一時汽罐の活動を休止して、復元を待つの外なかりき、吁かくして果して目的地點に達するを得べきか、日本軍は活動を開始せるなり、既に彼等は猛然として活動を開始せるなり。

正午艦隊の速力は十五節とせられぬ、されど旗艦の故障は再三斷續的に

再擧を圖らむ

露國軍艦アスコルド

ポヒエダ

一萬碼の大射程

命中彈

起り、殊に僚艦ポヒエダの如きも、遂に同一運命に陷りしぞ遺憾なる、此の間に日本艦隊は、軍容整々として單縱列をなし、吾に向つて行進しつゝあり、見よ敵の主力艦隊たる三笠・敷島・富士・朝日・日進・春日等は、我が艦隊と並行せる針路を取り、一萬碼の大射程に於て、悠然緩射を試みつゝ、六千碼にまで接近して、暫時亦遠く離れ行きぬ、其の態正しく吾等を愚弄するものゝ如し。

さりながら此の戰鬪に於て、吾等が受けたる損害は、甚だ輕微にして、就中殿艦たる我がヂャナの如きに至りては、直接の命中彈は一も之を蒙らず、唯

舷側・上部構造物・煙筒・檣の各所等が、夥しき敵彈の破片によりて、著しく外形を損ぜしのみ、兵員の負傷者も、僅々二名を出だしたるに過ぎざりしは、最大幸福と云ふべきなり。

斯くの如くにして、吾等は十二若しくは十三節の速力を以て、愉快なる航進を續けぬ、今やその前路には亦何物の障害をも認めざりしが、併し果してよく永久に此の汽力を存續し得べきや否や、そは聊か疑問とせざるべからず、然り之殆ど望むべからざる希望のみ。

追擊戰

さる程に日本艦隊は、堂々たる陣列を構へて、猛烈なる追擊戰を試みむとせり、四時十五分には、兩軍の距離も、一萬二百碼なりしが、忽ちにして九千四百碼にまで接近し來り、こゝに兩軍再び砲火を交ふる事となれり、時に四時四十五分。

射程減縮

此の交戰の初期に於て、其の射距離の遠き間は、兩軍の彈着に殆ど甲乙あるを見ざりしが、漸く射程の減縮さるゝと共に、吾は遂にやゝ不利の位置に立つべく餘儀なくされたるなり。

背面防禦

蓋し日本艦隊は、有利なる副砲と、多數の小口徑砲とを有するに反し、吾は六吋及び十二吋砲の三分一と、小口徑速射砲の全部とは、曩に旅順背面の防禦に充當せられて各艦共に其の備なかりしことは、確に漸次敗色を現はしたる主因となさゞるべからず、あゝ已んぬる哉、打たでは適はず、打つべき砲は少きものを。

慘狀甚し

敵の砲火は主として旗艦ツエザレヰツチに集中せられ、且つ艦隊司令官旗艦たるペレスウエツトも、忽ちにしてメイントツプマストを射斷せられ、次でホールトツプマストの頭部をも奪はれ、最早や旗艦としての使命を全うすべからざるに至り、慘狀は時々刻々に加はり來れり。

第三十三節　黃海々戰（下）

跳彈の結果

ペレスウエツトが、其のトツプマストに受けたる彈丸は、射擊としては極めて拙劣のものにして、云はゞ之一の跳彈の結果に過ぎず、偶然の僥倖とや云ふべからむ、されどペレスウエツトは、之が爲めに致命的の大負傷をなし

たるも同様なるは、何人も明かに知る所なるべし。

又之と殆ど同時に、ポルタワの甲板上なる、メンデリックの縫着部をも射貫せられ、凄じき大音響と共に、左舷側に墜落するを目撃せり、勿論かゝる問題は、さまで驚くべき程の大損害にはあらされど、該艦の正横に位置して、親しく其の破壊の惨狀を目撃したるものは、多少の恐怖と失望とによりて、より以上の精神的損害を蒙らざるを得ざりしなり。

精神的損害

去るほどに旗艦ツエザレヰッチは、五時五十分に至りて、俄かに……甚だしく狼狽したるものゝ如く、突如として左舷に回頭したりしが、同時に艦體は著しく傾斜して、殆ど轉覆せんばかりの有樣となれり、さなきだに恐怖の念に驅られたる我が兵員中には、往日ペトロパウロウスクの悲慘事を追懷して、張りさけむばかりの叫聲を揚げ、以て其の不幸なる運命を弔らはむとせしが、實は此の時敵の十二吋砲彈が、旗艦の司令塔に命中して、あらゆるものを破壞し、すべての人命を奪ひ、舵柄も其の接合部を摧かれ、自ら右舷一杯に偏したるを以て、遂にかゝる大傾斜を生じたるなりき。

左舷回頭

十二吋砲彈

レトビザン

此の時二番艦レトビザンは、正に旗艦の通跡を進行しつゝありしが、俄かに旗艦の轉舵せるを見るや、レトビザン艦長は吶嗟の間に、旗艦は或る被害のために一時列外に出づるものに相違なしと速斷し、啻に舊針路に復せしのみならず、敵艦隊に對向して、猛然突進するにぞ、吾等はレトビザンが敵に衝突を試むるにあらずやと、密かに手に汗を握らしめぬ。

然るに三番艦ポビエダは依然として舊針路を保ち、ツエザレヰッチは四番艦にして司令官の旗艦たるペレスウエットと、五番艦セバストポリとの間を進みて漸次戰列を突破し、同じく敵艦に對して衝突を企てたるものゝ如く、ペレスウエットとセバストポリとは、旗艦を避けむとして共に南に回頭し、レドビザンと駢馳の狀態をなせり。

司令長官の旗艦

されどペレスウエットは、司令長官の旗艦が、如何なる企てを有するやを、全く諒解する能はざるものゝ如し。

斯くの如く今や混亂は其の極に達し、殆ど陣形をなさゞるの時に當り、ツエザレヰッチの艦上にありて、一信號旗の飜るを見る。

第三十九圖

絶望的旗信

ウイットゲフト中將

ウクトムスキー少將

曰く『司令官は艦隊の指揮を讓る』と、之によつて艦隊の指揮官は司令官ウクトムスキー少將の手に歸せり、されど同少將の座乘せるペレスウエットは、曩にトップマストを斷絶せられたるが故に、最早や信號旗を揭揚するに由なく、辛うじて最高艦橋の手欄に信號旗を附して、『單縱陣を作れ』と命じたりしが、この信號旗は、比較的ペレスウエットの近傍にありたる者にさへ、猶容易に識別し難く、爲めに全艦隊は何等の方策も執るべきなく、空しく長時間を逡巡するの外なかりしなり。

此の信號によりて、曩に旗艦が司令塔を破壞されて、混亂の極に達したる時、艦隊司令長官ウイットゲフト、參謀長マセウイッチ少將、及びッエザレキッチ艦長等が、殘らず戰死したる事に就いて、最早や一點の疑ひを挾む餘地なきに至れり。

吾等は此の際内心に大いなる疑問を起しぬ、曰く『司令官ウクトムスキー少將は猶生存せるや』と、蓋し同少將にしてペレスウエットに生存しつゝありとすれば、よしや同艦が其のトップマストを斷絶せられたりとは云へ、猶

何れかの見易き場所に、司令官の將旗を掲揚すべき筈ならずや、檣樓にも、或は煙筒にも、之を掲ぐべき餘地は夥しく存するものを、其の全く司令官旗を見ざる以上は、嗚呼ウクトムスキー少將も亦遂に陣歿したるものと認めざるべからず、然り、さりながら之果して眞なるか、あゝ之果して眞なるか。

レイセンステイン少將

そは兎も角も此の上は、艦隊の指揮權なるものは、巡洋戰隊の司令官たるレイゼンステイン少將の手に歸すべきものなるが、此の際主戰艦隊の執るべき方策としては、巡洋戰隊と合同を遂ぐるまでは、各自適宜の行動を爲すか、若くは先任艦長の指揮に俟つか、何れか其の一を選ばざるべからざる運命とはなれり。

當然の措置

斯くの如くにして、主戰艦隊は混亂に混亂を極め、支離滅裂、殆ど收集すべからざる狀態に陷りしを以て、巡洋戰隊の司令官は、斷乎として其の指揮下の艦隊を率ゐ、以て主戰艦隊に合同せむと決心せり、蓋しこれ當然の措置と云はざるべからず。

此の時敵の主力は、北東に向つて、我が戰列の後尾を横斷しけるが、單縱陣より成れる六隻の裝甲艦隊は、其の距離齊々、亦堂々として寧ろ平時の艦隊運動を見るが如く、顧みて慚愧に堪へざるものありき云々。

平時の艦隊運動

此の戰爭の結果、敗殘のツェザレヰッチは上海港に遁竄して、おめ〳〵武裝を解除して、戰役の終る迄抑留せられ、巡洋艦隊司令官レイゼンステイン少將は、辛うじて戰艦に合同するを得たれども、其の所令更に行はれず、艦隊は徒らに紛亂を重ぬるのみ、しかも夜の幕は容赦なく此の紛亂團體を包みたれば、前記の如く中立地帶に逃れたるもあり、或は强て重圍の旅順に歸還して、只管自滅を待つの有樣ともなれり。

旅順に歸還す

蓋し露國の第一東洋艦隊が、掉尾の光彩を放ちたるものは、實に此の八月十日の黃海々戰なりき、あゝ其の後に於ける彼等は、遂に再び港外に活動するの機會だに得ざりしなり。

第三十四節　ノヴイツクの行方

旅順に於ける敵艦隊中、其の戰役の最初より、最も花々しき活動を企てゝ、

巡洋艦ノヴイツク

日本艦隊の注意を牽きたるものは、巡洋艦ノヴイツクなりき、由來ノヴイツクは提督マカロフの理想を、遺憾なく發揮せしめし快速巡洋艦にして、また之に艦長たるフオン・エッセン大佐は、剛膽を以て鳴れる人なり、同艦が八月十日の海戰に際して、味方の不利なるを觀破するや、長驅單獨にて、遠くサガレン島に迄落延びたる大膽無比の行動は、他の戰艦及び裝甲巡洋艦が、おめおめ旅順に歸來して、自滅を待ちたるに比し、敵味方共に壯とせし所なり。

エッセン大佐

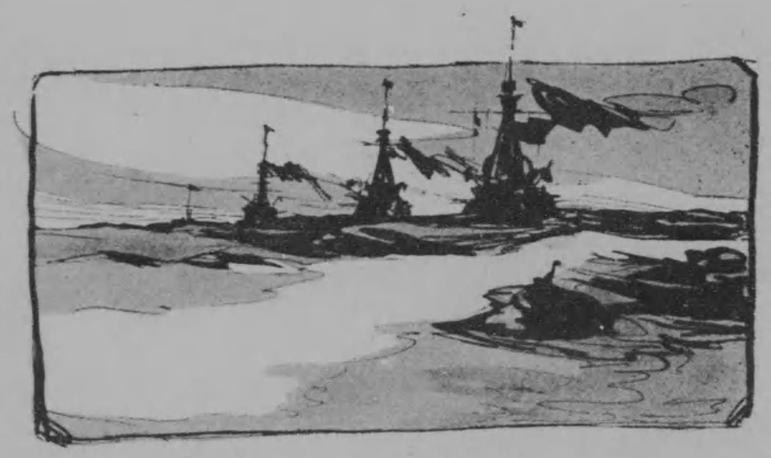
八月十日の海戰

エッセン大佐の下に、同艦に乘組めるスティーヤル大尉は、八月十日の海戰に關して次の如き記錄を發表せり、前記のセメョーノフ中佐の失れと、稍重複の嫌ひなきにあらざれども、三等巡洋艦としてのノヴイツクの行動を知るには、亦之を棄つるに忍びざるものあり、仍て左に錄す。

掃海艇の護衛

旅順口艦隊に對して、八月九日附『浦鹽に向つて出港せよ』との勅令は下れり、翌十日午前四時、本艦は先頭第一に外港錨地に到る、蓋し其の用務は、掃海艇の護衛に任ぜむ爲めなりき、而して艦隊は出港に際して、あらむ限りの努力を費したれども、猶全部の出港を了する迄には、約五時間餘を費さゞるを

後の祭



第四十圖　敵や何處に

得ざりき、以て如何に港口附近の危險多きかを知るべし。

然るに此の五時間は、極めて貴重なるものにして、日本艦隊は此の間に、悠々として配備に就くことを得たりしなり。されば我が艦隊にして、午前四時を以て、一齊に拔錨出港するを得たりしならむには、斷じて敵の勢力集中を許さゞるのみならず、彼等が配備をなす時には、既に遠く去つて、その追跡をも得せしめざりしや勿論なり、されどこは後の祭りのみ、今更云ふも甲斐なき事なるかな。

さて今回旅順を脫出すべき艦隊は、我がノヴイツクを加へて、實に十隻を算せ

バーヤン

軍の中堅

十二節の緩速力

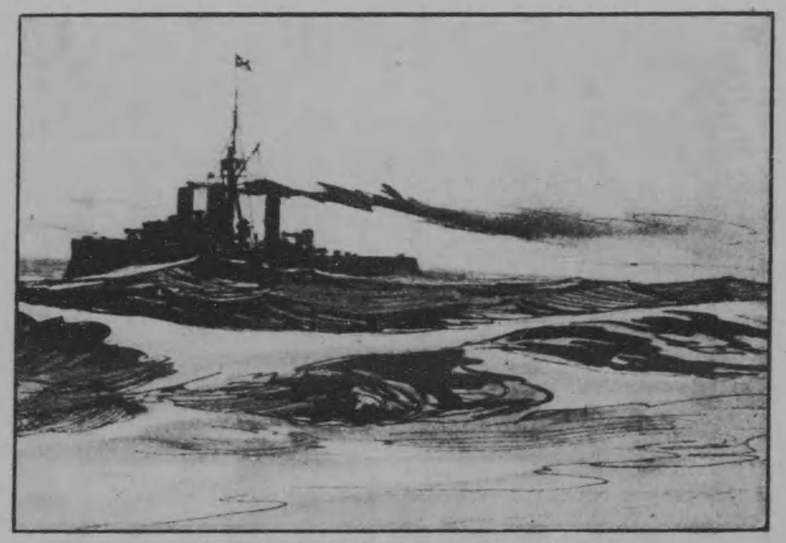
木製の僞砲

り、而も吾等が最良と誇れる、巡洋艦バーヤンは、曩に機雷に負傷して未だ船渠に横はる如き重傷患者なれば、不幸今度の行に加はるを得ず、戰艦ツェザレヰッチ、レトビザン、ペレスウェット、ポビエダの四隻は、比較的新式艦にして、其の速力の點に於いても、武裝にかけても、最も優良のものなれば、彼等は軍の中堅となれり、またセバストポリとポルタワの二隻は、既に老境に入り、また十二節以上の快速力を出す能はず、隨つて全艦隊の速力に、十二節以上を求むることは全く不可能となれり。

されば若し前記の二老朽艦を殘留せしめ、新式快速の中堅艦のみを以て、十六七節の高速力を保たしむるに於ては、悠々として逃亡の目的を達し得たらむものを、返すがへすも殘念至極、當日の戰鬪に、日本軍をして勝者の地位に置かしめたるは、其の主因何所にありや、他なし十二節の緩速力にあり。

且つ況や其の戰鬪力に於ても、之等各軍艦の六吋砲の數門は、既に陸上に運ばれて、海岸砲臺の備砲に充當せられ、殊にセバストポリの十二吋主砲の一門は、曩に損傷して同じく陸地の物となり、之に替ふるに木製の僞砲を以

戰鬪員の胸中



第四十一圖　ノヴイツクの航走

てせるが如き、何れも吾等の憤慨の種ならざるはなし。

こゝに艦隊司令長官ウイットゲフト提督は、よしや今度の行が勅命なればとて、到底目的地點に達すべからずとの信念を、確く抱き居たるものゝ如く、其の出港に際して、特に一驅逐艦を芝罘に派遣し、電報を以て旨を闕下に伏奏せりと云へり、司令長官の意中、既に斯の如し、一般戰鬪員の胸中亦知るべきのみ、蓋し思ふに何人と雖も強て恐るべき災害に遭はむが爲めに、好むで出港するものとの果敢なき覺悟を有したる

や勿論なり。

此の日の戰鬪は、十二時三十分に始まり、中途少時間の休止をなしたるのみにて、午後三時まで殆ど間斷なく繼續せられ、日本軍は二十三の戰鬪單位の外に、三十隻の驅逐艦を以て抵抗したるものなりき。

三十隻の驅逐艦

しかし午後三時迄の間には、我が艦隊中何れの艦も、著しき損害を被らざりしことは確實なるものゝ如く、徐々として東南に針路を執りしが、既にしてセバストポリとポルタワの續航が、果して困難の狀態に陷りしを以て、全艦隊は是が爲めに、屢々速力を緩めざるを得ざりき。

此の日戰鬪の初期にあつては、日本艦隊は其の戰列に十二隻を有するに過ぎざりしが、二等巡洋艦より成れる數個の戰隊は、漸次南方より來り同し、三等巡洋艦の一枝隊も亦殆ど同時に北方より現はれ出で、午後四時三十分の頃には、彼我の距離著しく短縮し、敵彈の命中するもの漸く多きを加へ、我が大檣折れ、我が煙筒破れ、戰鬪正に酣となりしが、吾等は元より直接戰鬪に與らざりしを以て、其の損害の程度如何を充分確認すること能はざりしを

戰鬪正に酣也

遺憾とす。

旗艦の損害

已にして午後五時、旗艦ツェザレヰッチは、何等の信號をも掲げずして、俄かに左舷に回頭せしが、かゝる異例は同艦が、何等かの大損害を被りて、進退の自由を失ひし證據なれども、而も此の行動が、意識的に行はれしものと認めたる自餘の諸艦は、全く旗艦の通跡に入らむと欲し、俄然其の行動を採りたるものゝ如し。

戰艦の密集團

去る程に吾等は、此の事ありて後間もなく、司令長官ウイットゲフト中將の戰死によりて、ウクトムスキー少將が、代つて艦隊の指揮を執るとの通報に接したるが、此際に當り、旗艦を取り卷ける戰艦隊は一の密集團をなして、混亂も亦甚しく、遂には各自勝手の方向に轉首するの外なきに至り、其の見苦しき有樣には、味方の吾等も愛想をつかし度き程なりき。

然るに此の混亂を見て取りたる日本艦隊は、機乘ずべしとなし、直に急射擊を以て、雨霰と大彈丸を飛ばし、新長官の旗艦たるペレスウェットに對し、最も凄しき攻擊を敢行したるが故に、同艦は前檣後檣共に之を失ひ、最早や

高艦橋の欄干

舊草蘆の人

反對の命令

信號を掲ぐるに其の所なく、辛うじて高艦橋の欄干に之を掲げ、旅順に歸還すべきを命ずるに至れり。即ち浦鹽逸走の企ても、こゝに全く一場の夢と化し去りて、我が艦隊は再び舊草蘆の人とならざるを得ざりしなり、あゝ之果して策の得たるものか、否何人もかゝる事を欲せざるには相違なけれども、現下の事情は恐らく他に執るべき方策を見出すこと能はざりしならむ。

第四十二圖　日暮れて波は

されど吾等は巡洋艦隊司令官より、之に反する命令を受け居るが故に、必ずしも戰艦隊の跡を追はむとは欲せず、寧ろ全く相反したる方向に、其の針路を採りしを以て、其の後に起れる各種の出來事に就いては、一も之を語る資格を有せざるなり。

石炭積込の作業

悲慘なる運命

其威を振ふ

已にして吾等は、單獨を以て即夜膠州に入り、公式手續を了したる上、夜を徹して石炭積込の作業に從ひ、翌日日出と共に出港を餘儀なくされて、直に浦鹽に向ひたり、對馬水道は敵の哨戒嚴重なれば、已むを得ず不經濟なる太平洋を横斷することゝしたるが、最初膠州にて積載せる石炭は、元より炭庫に充たざる有樣なれば其の航海中の苦腦は、到底常人の豫想すべからざるものなりき、即ち吾等は少量の石炭を焚いて、長途の航海をなすべき悲慘なる運命の下にあり。

蓋し今回の戰役を終始して、吾人の追懷に最も傷しき印象を殘せるものは、寧ろ砲火相交ふる戰場の出來事にはあらずして、却つて單獨航走中に於ける、云ふべか

らざる苦悶の數々なるべし。

夜となく日となく、吾等は憂苦を以て充たさるの外何物をも有せざりき、所期の地點に入港せざる前に、本艦の石炭を燒盡する如きことはなきや、若し果して之を燒盡したりとせむか、吾等は木隅の如く、死せる巨鯨の如くにして、大洋上に浮流するか、然らざれば敵國の海岸に擱坐するか、何れにしても自滅するの外なきことを覺悟せざるべからず。

死せる巨鯨

斯の如き不安に被はれて、日を送り夜を過して、既に一旬の日子を經過し去れり、かく云はゞ人或は疑を懷かむ、石炭の消費量と航海の浬數を算定したらむには、毫も斯の如き不安を抱くの必要なからむと、然り斯る見易き例は、三歳の童子も亦よく之を知る、元より之吾等の口より言ひ出づべき言葉にはあらざるなり。

經濟消費量

さりながら我がノヴイックは、前後七閲月の間、堪ゆべからざる勞役に服し、隨つて其の汽罐の公稱要目には、殆ど一も信を措くに足るべきものなきを如何せむ、例へば本艦の經濟消費量は、一日三十噸と定めらるゝが故に、之によれば一時間十節の速力を以て、浦鹽に走ることは、極めて容易の問題なれども、實際は著しく之に超え、第一日にして既に五十噸の石炭を費し、二日目には五十五噸、三日には更に五十八噸を要し、其の公試運轉に於て認定されたる消費量の倍額を要する事となれり、噫吾等が唯一の生命たる貴重の石炭は、かゝる勢を以て一縷の煙と化しつゝあり、果してよく目的地點に達するを得べきか、あゝ果して浦鹽に達するを得べきか、吾等が抱ける所のものは、決して杞憂にあらざるなり。

一縷の煙

全艦の將士は、心を靜平に保ち、人力のすべてを盡して遺憾なかりき、されど不幸にして吾等が千島群島に接近したる時、其の炭庫に餘す所のものは、僅かにサガレン島の南端なる、コルサコフ港に達するを得るに過ぎざりき、即ち辛うじて同港まで漕ぎつけなば、或は炭庫を充たすに足るべしと思惟し、專ら航走に力めけるが、已にして本艦の針路は、日本人が千島群島に設立したる燈臺に對して、漸次近接しつゝあるのみならず、白晝こゝを通過すべき運命に會せり、併しながら吾等は最早や一刻も猶豫すべからず、日本の本

千島群島

海底電線

士と連絡せる海底電線は、忽ちにして吾等の通過を警報せり、其の後は之を記すに忍びず、唯吾等はコルサコフ港に、ノヴイックと飽めぬ別れをなして、愛すべき彼を見棄つるの外なき運命に會したることを記すに止めむ。

第三十五節　錦江の波瀾

薩摩富士

さる程に火崎を廻りて、佐多岬の燈光を右舷に見たる我が艦隊はやがて薩摩富士の名に高き開聞嶽を、近く左舷に眺めて、風光愛すべき鹿兒島灣に入港したり、こゝは一に錦江とさへ呼ばれて、獨り風色の明媚を以て鳴れるのみならず、

文久の役

過ぐる文久の役に、此の地の武士等が、必滅的勇氣を揮つて、英艦と交戰したる物語によつて、更に一入の趣味を感ぜしむ、いでや當時の愉快なる物語を追懷せむ。

勤王攘夷

德川幕府國を開きて、泰西の諸國と樽俎のことに當るや、漸くにして天下の威信を失ひ、勤王攘夷を唱ふるの士、海内各所に蜂起して、物情恟然たるものあり、此の時に當り薩摩の國主島津久光は、つら〳〵宇内の狀勢に鑑み、泰西の事情を察し、寧ろ此の際鷸蚌の爭ひの、却つて漁夫の利たるを憂ひ、遂に入朝して公武合體の義を立つるに至れり。

公武合體

茲に於て朝議又之を容れ、文久二年五月、大原重德卿を勅使として、將軍の上洛、五大老の選擧、一橋越候推任の三事を關東に致さしむ、久光卽ち之に從ひ、勅使と共に關東に下ることゝはなれり。

生麥の變

已にして其の事終り、無事歸洛の途に着きけるが、久光は勅使に先むじて江戸を發し、八月の一日炎暑を冒して品川を過ぎ、將に生麥村に至るや、一英國士官あり、騎馬のまゝにして、久光の隊伍を横斷せむと欲す、仍て久光の從士等、之を制止すれども、外人元より我が武家の作法を知らざるにや、頑として聽かず、茲に於て奈良原喜左衞門と云へる者、英人の無禮を憤るの餘り、直に進むで之を斬殺したりき。

報を得たる幕府は、驚愕措く所を知らず、久光に對して道を東山道に取るべく勸告したれども、硬骨なる彼は何等顧慮する所なく、勅使に隨伴して堂堂京師に還れり。

賠償金十五萬元

阿修羅の巷

防禦準備

然るに英國政府は、生麥の變を聞くや擧朝大いに憤怒し、幕府を威壓して賠償金十五萬元を得、猶更に薩藩に對しても、同じく三萬元を提供せしめむと欲し、英國支那艦隊の提督キューバ中將に命じて、部下の艦隊を率ゐ、三年六月二十二日、横濱を發して鹿兒島灣は向はしめたり。

あゝ處女の如く、しかし優しき櫻島よ、漣波寄する錦江の、かくて阿修羅の巷とはならむするか、古來勇武を以て鳴れる薩州なり、殊に英明の聞え高き當主久光は、英國艦隊に對して、此の際如何なる手段を盡して、よく之を歡迎せむとするか、彼に果して其の準備ありや、否や。

之より曩久光は、京師にありて英艦來攻の警報を得るや、直ちに辭して歸國の途に就き、其の月二十三日無事鹿兒島に歸着せり、茲に於て先づ久光は、伊地知正治・大保久利通等に命じて各砲臺を巡檢せしめ、更に砲座を增加し、砲手を選拔する等、防禦の準備は着々として成れり。

一方英國支那海艦隊は、ユリアラス號を旗艦とし、ビヤール・バーサス・アーカス・レースホース・コクユデド・ハボック等七隻を以て成れる大艦隊なるが、

旗艦ユリアラス

大砲八十餘門

代理公使ニキール

就中旗艦ユリアラスの如きは四十六門の大砲を有する堅艦なり、薩藩は之に對して、祇園州・大門口・辨天波止・砂揚場・櫻島横山・洗出し・鳥島・沖小島等の要所に砲臺を築き、攻城砲・野砲・白砲等、八十餘門の砲口を揃へて、敵艦隊に對抗せむとす。

さる程に六月二十七日も暮れて、其の夜十時の頃しも、英艦は鹿兒島城を距ること三里なる、谷山鄕の沖合に碇泊せり。久光之を聞くや、各砲臺の守衛を嚴重にし、指揮の號砲を發せざる間は、如何なる理由ありとも、猥りに發砲すべからずと嚴命せり。

明くれば二十八日、英國艦隊は谷山沖の錨地を出て、鹿兒島を距る十二三町の地點に漂泊し、祇園州等の砲臺に對して戰列を敷けり、仍て薩藩も亦之に對して戰備を整へ、一命の下に直に火蓋を切らむと身構へぬ。

こゝに又旗艦に搭乘せる英國代理公使ニキールは、島津茂久に書を致して要求するやう『生麥に於て、我が國人リチャードソン等を襲殺したるものを捕へ、英將の面前に於て刑戮し、死者の遺族救恤のため、金三萬元を得む』と、

二十四時を限度として回答を求む。

川上但馬

翌二十九日に至り、薩藩の執政川上但馬、英艦に答書を送る、曰く『人を殺すものを死刑とす之當然の道なり、然れども兇者跡を晦まし、未だ縛に就かざるを如何せむ。抑も我が國は、貴國と條約を結び、陸上の遊歩を認許すと雖も、未だ大名の行列を横斷することを許さず、之を犯す者は殺戮の刑に處すること、我が國古來の法規なり、即ち國法に遵つて之を行へるのみ、苟も不可わらば、幕府に稟議して措置を待たむ』と、午後英艦は敷根方面に錨地を改め、日暮全艦隊櫻島に接して投錨し、旗艦は新臺場の沖合に碇泊せるを認む。

我國古來の法規

重富沖

七月一日キューバ中將は、麾下のハボックを重富沖に出動せしめ、我が汽船の所在地を視察し、且つ沿海の測量を行はしむるなど、頗る傍若無人の振舞ありしかば、久光は伊地知正治に命じて英艦に嚴談せしめたり。

茲に於て正治は、即時ハボック號に赴き、司令官に面接して曰く『最早や足下に答ふべきものなきに如何なれば掩留日を重ぬるか、正に横濱に於て事の曲直を議せよ』と、キューバ色をなして曰く『我が要求を容れざれば、一氣城市を燒くの外なし其の心して悔を殘す勿れ』と。

正治之を聞くや意氣昂然として云ふ『事の是非を察せずして、猥りに砲火を向くる如き事あらむか、吾亦之に應ずるの道あり、何ぞ足下の言辭を俟たむや』と、直ちに席を蹶つて起ち、仔細に艦内の模樣を視察し、歸つて之を久光に復命せり。

ホーラス大佐

初め英國代理公使ニキールは、川上但馬の書を得、譯官に命じて飜譯せしめしが、薩藩の到底我が要求を入れざる事を知り、キューバ提督に請うて、最後の手段を採らしむるに決す、茲に於てキューバは、前約を重むせず、翌二日未明軍艦ビヤールの艦長ホーラス大佐に命じ、ビヤール、アーカス、レースホース、ハボックの四艦を率ゐて、重富沖へ回航せしめ、同所に碇泊中なりし薩藩の汽船青鷹・天祐・白鳳の三隻を捕獲し、以て假根據地に歸り來れり。

薩藩の汽船を捕獲す

然るに此の三隻には、數名宛の藩士乘組み居たりしが、何れも皆櫻島に上陸して、一人も捕虜となる者あらざりき、蓋し敵は、此三隻を捕獲して質となさば、島津氏も必ず其の要求に應ずるならむと速斷し、斯る非行を敢てした

盜賊艦隊

る者なるが、薩藩に於ては、此の事ありてより愈々憤慨の度を高め、未だ談判の要領を得ざるに、妄りに我が船を掠奪す、盜賊艦隊撃たざるべからず、撃ちて膺らさゞらるべからずと、怒髪天に沖せむばかり、全藩の男子協心戮力して、悉く起てり、見よ櫻島の彼方既に腥氣海を壓し、妖雲天を掩ふにあらずや。

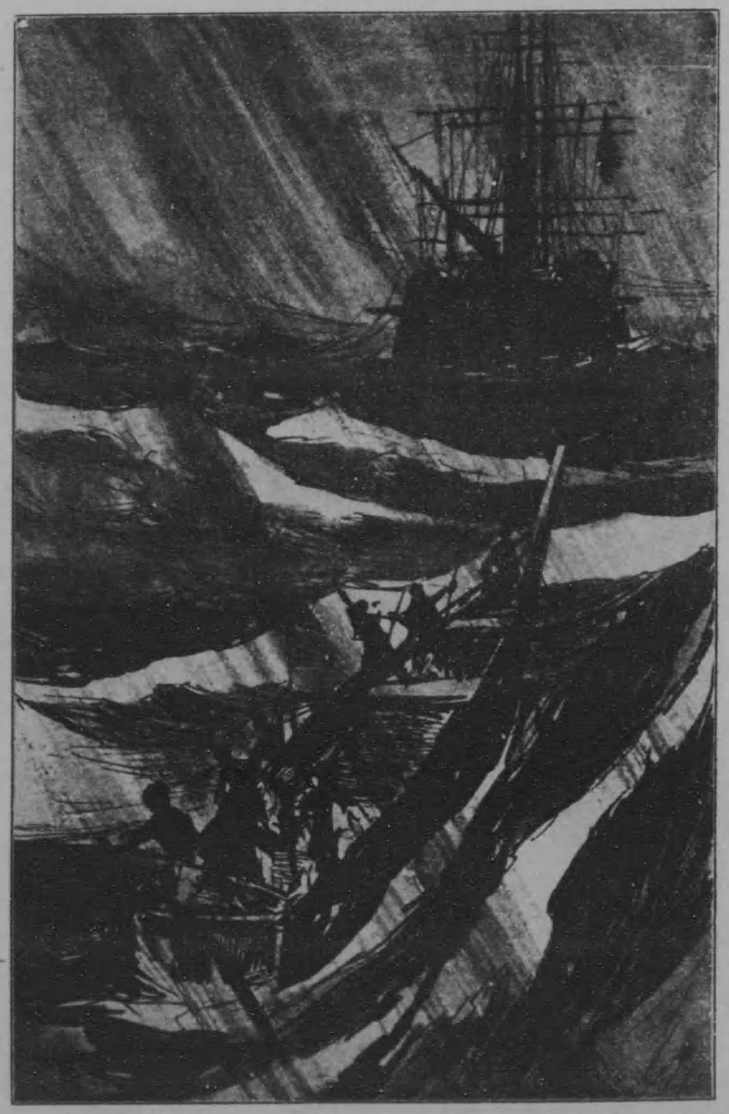
第三十六節　恥辱の錨

天賜の御劔

全藩の士氣大いに振ふを見るや、久光は小松清廉・川上久齡等の參謀を召し、旨を授けて曰く『戰機既に熟せり、今の時を失ふべからず、汝等諸砲臺を巡檢して、更に士氣の振作を計れ』と、自ら茂久と共に數騎を從へ、天賜の御劔を馬首に奉じ、出て千巖寺の高樓に司令部を置き、軍を督し戰況を視察す、爲めに薩藩の士氣振ふこと大なり。

已にして天も亦外奴の暴慢を憤るにやあらむ、空俄かに搔き曇りて、天地暗澹晦冥にして咫尺を辨ずべからず、疾風突發、砂を飛ばし波を逆卷き、大雨沛然として降り來り、正に車軸を流さむばかりの有樣となり、光景うたゝ慘

第四十三圖　薩藩の決死隊



絶を極め、將士等しく面を向くべくもあらず、されど憤り其の極に達せる薩藩の勇士等は、風雨の狂暴を物ともせず、よく自然の威力に抵抗して、戰鬪開始の號砲を、今や遅しと待ち受けたり。

時分はよしと、一發の砲聲は耳を劈きて、雨中に白烟を漲らしめぬ、見よ戰端は開かれたり、無數の士卒は旗船ユリアラスを包圍して激しく攻め立て、遂に其の綱索を斷つに至れり。

水火相競ふ

茲に於てキユーバ提督は、曩に抑留する所の三隻を燒棄せしめしかば、炎烟天を閉して水火互に相競ひ、修羅の巷もかくやあらむと思はるゝばかり、而も此の間に敵艦隊は、隊伍堂々と單縱列に編成され、ユリアラスを先頭として、先づ北方の祇園州を砲擊し、漸次南方の各砲臺に對して、猛烈なる攻擊を敢行せり。

彈道線

狂暴なる風雨は、いつ止むべしとも思はれず、敵艦隊は怒濤に翻弄せられて、其の行動漸く意の如くならず、烈しき動搖のために、彈道線定まらず、或は空中に甥裂し、或は徒らに海水を奔騰せしむるもの多し、此の際薩藩の士卒

裸體の突擊

等は何れも着衣を脱して裸體となり、敵艦に向つて肉薄す、蓋し凄絶其の極に達すとや云はむ、又砲術長伊地知正治の如きは、自ら砲架上に自若として屹立し、彈雨に曝露して督戰する狀は、彼我共に激賞して已まざりしと云ふ。

さる程に薩兵の砲彈は、英艦に命中するもの漸く多く、或は旗艦の砲門を粉碎して之を沈默せしめ、或は其の中甲板に破裂して、一時に十數名の死傷者を生ずるなど、光景いよ〳〵慘澹たるものあり。

已にして偶々英艦より發したる一彈丸は、市街の一商賈の硫黄藏に爆裂して火を發し、折からの烈風に煽られて、見る〳〵うちに數百戸の人家を燒盡したるが、之がために薩兵はいよ〳〵競ひ起り、遂に旗艦ユリアラスの司令塔破壞

司令塔を破壞し、艦長大佐ジョスリン、及び副長少佐ウキルモットを斃し、其の他の諸艦に對しても亦、多大の損傷を蒙らしめたり。

又他の一隻レースホースは、機關部に一彈を受け、進退の自由を失ひて、祇園州前面の淺洲に膠着し、辛うじて沈沒を免れしが、やがて僚艦に曳かれて戰線外に出づる等、敵の混亂は今や其の極に達し、日漸く暮れて兩軍一時其

の砲火を收むるの餘義なき事となれり。

翌くる三日も依然として風雨凄しかりしが、キューバ提督は、前敗を報ぜむと欲し、單縱列をなして、堂々進擊し來れり、薩兵は昨來の經驗によりて、益々勇を揮ひ、敵艦の頭上に砲彈を落下せしむること雨霰の如く、キューバ提督は如何に心ばかり焦慮るとも、到底面を向けて、一歩も進むべからざるの窮境に陷りぬ。

單縱列

されば此の上は、強いて進擊するの不利なるを知り、一旦退却して更に陣列を整へ、再擧を企つるにしかずと、全艦隊に下令して、且つ戰ひ且つ退かしむ、而も薩兵は寸時も戰の手を緩うせず、機に乘じて敵艦に猛打を加へければ、バーサスの如きは、周章狼狽、錨を拔くの暇だになく、錨鎖を切斷して逸走せむとせり。此の有樣を確認したる沖の小島の砲臺守兵等は、バーサスを追擊して、更に其の舵機をも損傷せしめしにより、英艦の困難名狀すべくもあらず、遂に破艦を棄てゝ横濱に敗走するに至れり。

錨鎖切斷

二日に亙る戰鬪に、敵の戰死者は、將校二十三名、卒三十餘名を出しゝが、之に反して薩軍は僅かに一名の死者を出したるに過ぎず、バーサスが海底に遺棄したる大錨を收め、凱歌を擧げて戰勝を祝しぬ。

元來薩藩に於ては、英艦の來攻以前に、既に豫め之を塵滅すべき術策を定め、五十人の決死隊を選拔し、身を商賈に變し、潛かに英艦内に伏匿せしめ、機を見て一時に起り、先づ其の將校を斬殺し、陸軍と策應して、一兵卒をも餘すまじと企畫せしが、遺憾にも當日は風波狂暴を極め、殆ど短艇を近づくるに由なく、折角の策略も遂に施すべからずして止みしと云へり。

五十人の決死隊

風雨狂暴

久光は斯くの如くにして、英艦隊を物の見事に敗走せしめしかば、直に捷報を奏聞せしに、朝廷にては叡感殊に淺からず、勅書を賜ひ、位階を進めて其の功を賞せらる、さりながら薩藩にては、よく世界の大勢を洞察し、會議を開きて決するやう『英艦の再擧は、何等恐るゝに足らざれども、今や各國と條約を締結したるの時、一の私情を以て戰ふは元より得策にあらず、我が軍既に勝てり、彼と和する此の時にあり』と、藩士重野安繹を横濱に遣し、キューバ提督を訪はしめ、遂に和議成立するに至れり。

世界の大勢

和議成立

かくて後英艦は、薩藩に請うて、曩日の戰鬪に遺失せし錨を得たり、蓋し海戰に於て錨を失ふことは、海軍々人の最大恥辱とする所、敵の以て世界萬國に示して、誇稱し得るものたり、されば之を敵國より贖はむとするには、莫大の賠償を要す、然るに英人は、一金を費さずして、薩藩より之を讓り受け、爲めに深く其の高義を德とせりと云ふ。

薩藩の高義

第三十七節　海底の財寶

古來幾多の海戰は云ふに及ばず、風波のために沈沒したる艦船の數は、殆ど幾許なるや、計り知るべからざるものあり、吾等はこゝに思ひ及ぶ時、海底深く祕めらるる、財寶が、如何に夥しきものなるや、先づ第一に此問題を心頭に浮べざるを得ず。

千歲の恨

之等の夥しき財寶は、人知れず深き海底に、呻吟して、千歲恨みの聲を斷たざれども、吾等は不幸にして、未だ之が救誓の船あるを知らざる也。されば先づ古き記錄によりて、海底の財寶を調ぶるも、時にとりては趣味深き問題にあらずや。

ナイル海戰

ナイル海戰に、提督ホラシオ・ネルソンのために、再び起つべからざる大打擊を蒙りし、佛船大東號の如きは、六百萬圓以上の財貨を積み込み居りしのみならず、ヴアレッタなる羅馬敎寺院より鹵獲せるものゝみにても、殆ど計算すべからざる巨額に達せしと云へり。

大東號

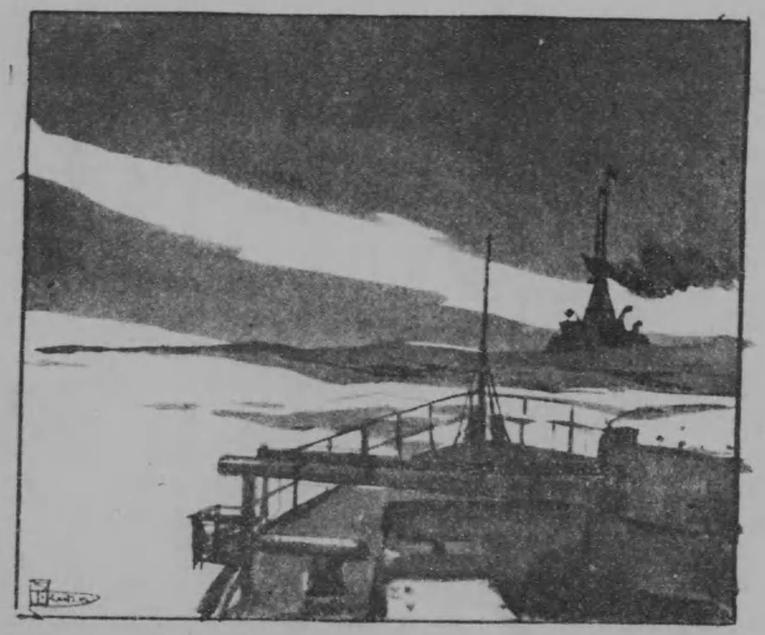
大東號はナポレオンの命によりて、佛國軍隊に給與すべき俸給を載せて、航海の途に上りけるが、艦長ポレソンピーは、多年海上の生活になれしに拘らず、其の積載品は殆ど旗魚の腹中に葬られしと云へり、又大東號と同一運命に陷りし戰鬪艦ルーテーヌは、三十二門の巨砲を具へし大艦なるが、千七百九十九年和蘭の海濱に於て、暴風雨に襲はれ、暗礁に乘り上げて、空しく難破せり。

戰艦ルーテーヌ

ルーテーヌの沈沒後、約十八ヶ月の間に、八十萬圓の正金を發見したりしが、實際同號の所有せし正貨は、より以上夥しかるべしとの見込みにて、千八百十四年再び引揚げ工事に着手したりしが、最早や艦體は、深く砂泥中に埋

前後七ヶ年の作業

ロイド氏



第四十四圖　十四吋砲

沒し居たりしを以て、前後七ヶ年の作業も、殆ど效果を奏せず、僅少なる銀貨を引き揚げ得たるのみなりしかば、翌千八百二十二年には、更に莫大の資金を投じて、一層大仕掛の引揚げ作業を企てしかど、之又何の效なく、ルーテーヌの引揚げは、遂に放棄するの止むなきに至れり。

已にして此の事を聞き込みたるは、有名なるロイド氏なりき、彼は先づ和蘭政府に談判して、其の發見物の半數だけは、同政府に納付すべき約定の下に、着々作業を進行せしめしが、前後三十五年に亙れる不斷の努力さへ寸效を奏せず、得る所一もなかりしと云ふ。

黃金の光輝

されど飽く迄堅忍不拔の意志を有するロイドは、毫も屈する色なく、更に政府に對して數年間の延期を求め、挺身其の事に當りしかば、天も亦彼が意氣にや感じけむ、夫れより四年を經て、漸次美しき黃金の光輝は、暗き海底に燦然として輝きはじめぬ。

搜索費二十五萬圓

茲に於てロイドは、忽ち二十五萬圓の金貨を收め得たるが、こは採收物の極めて小額なるものゝみ、黃金にも替へ難き最貴重の遺物は、續々として潛水者の手によりて、陸上に運ばれたり。

茲に於いてかロイドの喜びは一方ならず、遂に千八百七十一年、議會の協贊によりて、二十五萬圓の搜索費を得、鋭意卒先して事に當りしかば、漸次其の效果を現し來り、遂には重量なる大砲の類をも引揚げ得たりと云ふ。

次に英國軍艦ド、ブルック號が、千七百九十八年と云ふに、北米合衆國なる

二百人の捕虜

レウキス沖に於て沈沒せしが、同艦は之より先、西斑牙の一軍艦を捕獲し、夥しき正貨、寶石の類を奪ひ、且つ貳百人の捕虜をも乘せたるまゝに、海底深く沈みたるものにして、最も哀れなる二百人の捕虜は、暗き艦底に鐵鎖を以て繫がれたるまゝ、終天の怨みを呑みて沈み行けり、謂ふに此の莫大なる財寶と、數百の墳墓とは、將來永く何人の手にも觸るゝことなく、朽ち果つるに相違なけむ、雨暗き夜、波上に燐光を漂はしめて、幽鬼の哭くを聞くこともやありなむか。

美術品と古器物

又千六百四十八年に、テーブル灣内に沈沒したるハルリーム號は、歐洲の博物館に賣込む目的を以て、多くの美術品、古器物の類を滿載したりしかば、同艦の沈沒したる海底は、宛然一大古物市場の如き觀を呈せしならむ、然るに星霜二百有餘年を經て、千八百八十三年陶器、硝子器、佛像、銀器の類を續々引揚げたりしが、其の銀器の如きは、全く海水に腐蝕して、本質を失ひ居たりしと云へど、獨り陶器類のみは、何等の變化をも呈せず、殆ど沈沒當時の現狀を存して、再び陸上の人の手に收まりしと云ふ。

泰西の記錄

吾等はかゝる泰西の記錄を見るにつけて、如何に海底の財寶の夥しきかを知れり、敢て舊きを云はず、日本海々戰場には、十數隻の沈沒軍艦あり、太西洋ニユーフアウンドランド附近には、かの巨船タイタニックの横はるあり、

海底の墳墓

之等は皆必ずや夥しき財寶を積載し居たるならむ、弔ふ人なき海底の墳墓を發きて、無緣の魂魄を慰め、無用の寶を收めて、有用のものたらしむるは、亦吾等が當然の責務にはあらずや。

第三十八節　吾等が前途

佐世保の港

數日間を波靜かなる錦江灣に碇泊して、各種の作業に從事したる我が艦隊は、今又此の地にグッドバイを告げて、更に西の方佐世保の港に赴かむとす。

見よ櫻島は、曾ての大爆發をも忘れたらむものゝ如く、深く沈默を守りて、吾等が行を旺むにせむとす、今朝八時の出港と云ふに、甲板に出て、盡きせぬ名殘りを惜めば、山は深き曉靄に閉されて、明かに見え分らず、鹿兒島市一帶

鷄聲狗吠

の連亮は、近く吾等が雙眸に入りて、鷄聲狗吠亦手に取るが如く、當年薩藩が英艦と鎬を削りし遺跡も亦、吾等が永き思ひ出の種とやならむ。

淨光明寺

南洲翁が終焉の地たる城山は何處ぞ、綠樹鬱蒼として茂れる小高き丘か、丁丑の戰歿者を祀れる淨光明寺の墓地は何處ぞ、艦は吾等が聯想を乘せて、靜かに其の歩を轉じぬ、見よ櫻島は薄き煙を吐きて、吾等が航路の安泰を祝福するものゝ如く、

第四十五圖　吾等が行手

大隅半島

薩摩富士は手を延ばして、來よとばかりに吾等を招くものに似たり。

かくて我が艦隊は大隅半島を左舷に眺め、鹿兒島灣を出て、西に向ひぬ、思へば横須賀を出でしより既に二ヶ月、彼所に春の花と別れてより、こゝに眞夏の烈日を迎ふるまで、漸く海上の生活に馴れて、聊か日本男兒の意義ある月日を送り得たることを、こゝに改めて感謝せざるべからず。

意義ある月日

しかも海上生活を實地に味ひ得たる吾等が、鄕黨に齎すべき苞苴の、決して少なからざるを喜ばずむばあらず、否吾等は自身の蒙を啓きしことの、尠少ならざりし事を、先づ第一に喜びて可なり。

恐るべき魔界

はじめ吾等の未だ海上の人とならざりし時は、唯徒らに海と云ふものゝ、恐るべき魔界なるやに感じて、風雨の狂暴、波濤の襲來に思ひ到れば、よしや航海の技術進歩し、造船の完全を致せし今日とは云へ、一日一夜も晏如として、生活すべからざるやに思惟したりき、否こは獨り吾等のみならず、吾等の周圍のすべては、寧ろより以上の恐怖の念を抱き、切に吾等が行を止めむとしたる事ありき。

海の趣味

吾等は今や漸く豫定の半を過ぎて、海の趣味を解し得たり、珍しき事の數數、不思議なる出來事の數々は、隨時隨所に筆錄して、陸上の人に其の欣びを頒つべく、玆に暫く筆を擱きて、更に後日の好機を待つことゝせむ。愉快なる

かな吾等が前途、あゝ愉快なるかな吾等が前途

附錄

遠洋航海記

十一月二十五日！あゝ今日は吾等の出發すべき愉快の日だ、一萬九千浬の航程、日數一百二十五日、吾等が艦には司令官加藤少將が座乘された、其の門出を壯にすべく、午前八時十五分には、加藤吳鎭守府司令長官が來艦せられ、次で伊東元帥・上村・瓜生・出羽・島村・伊集院の諸氏が續々來艦される、特に上村第一艦隊司令長官は、候補生一同に對して、勇壯にして充分に奮勵せよとの訣別の辭を殘して去られた。

訣別の辭

宗谷阿蘇

午前九時出港準備、十一時出港用意終り、其の四十分に先づ吾等が僚艦たる宗谷は動き出し、次いで阿蘇も纜索を放つた、在港の各艦船は一齊に登舷禮式を行ひ、安全なる航海を祈る旨の信號旗を掲げ、吾等も亦登舷禮式を以て之に酬いた。

かくて十二時には、曳索を放ちて悠々と航進を始めた、今より後四ヶ月、吾等が其の任務を完して、再び此の横須賀の港に錨を投ずる日は、既に上野や向島に、櫻の花の吹き初むる時節であらう。先づ夫れ迄はさらば、さらばよ人々壯健なれよと、吾等は南に向ふのである。

ロングサイン

見送人の乘れる船、樂隊を乘せた船は、猶吾等を追うて離れやうとはせぬ、彼はロングサインの花のやうなる樂を奏し、吾も亦奏樂を以て之に答へた、日東海國男兒の意氣は、正に天を衝かむばかりである。

二隻の驅逐艦

船の影の見えずなるまで、雙方共帽をふり手巾を振つて別を惜むだ、南の風吹きて艦の少しく動搖を感ずる頃には、もう見送の船は一艘も居ない、唯巨浪を恐れぬ二隻の驅逐艦ばかりは、港口まで吾等を送るべく疾走して居る。

千秋の雪帽

天清く晴れて白雲僅に流れ、海は深き藍色をたゝえて、白龍の如き浪のうねり、遙かに屹然として高く聳ゆる不二の根は、千秋の雪帽を冠して、吾等の征途を祝する樣に思はれた、さて四時に近き頃、商船學校の大成丸が、舘山灣に假宿して居るのを見たが、折から俄に浪が高くなつて、機關室や浴室の排水口から、瀧の如くに潮水が侵入して來るので、遂に士官次室糧食庫等は、水責の苦しみを受け、膝まで水に沒しながら、バケツを以て汲み出すと云ふ大騒ぎを演出した。

軍歌合唱

五時五分總員の軍歌合唱をやつた、浪はいよ〳〵高く、澎湃として舷側を打つ、軍歌と濤聲と相和して、壯快限りなく、次で軍樂隊も奏樂の練習をはじめた、廣き大海の唯中にて、かゝる催しをするので、海若も壯絶を叫ぶのか、艦の動搖はます〳〵激しい。

滿天の紅潮

やがて日は西海の波間に沒しやうとして、滿天紅潮漲り、西には大島黑く横はり、富嶽の清容は依然として嚴乎吾等の行途を守つて居る樣に思はれた、しかも日の沒すると共に、浪いよ〳〵激し、風威更に盛に、爲めに新に乘艦した四等卒の如きは、大半船暈に苦しめられて、顏色青菜の如く、候補生の中にすら、頭の上らぬ者が出來たが、夫れでも胃液を吐きながら、配置された當直の勤務を忘る樣な者はなかつた、何しろ浪が激しく打ち込むので、窓と云

ふ窓は、悉く密閉されて空氣の流通惡しく、艦内の蒸熱甚だしく、動搖は刻一刻に加はるばかり。

限なき青海原

二十六日＝日曜日である、昨日の夕方まで吾等を見送つて呉れた富士山も何處へ行つたか今日は姿を見せない、東西南北何れの方面を見ても、限りなき青海原に、波を蹴つて進む我が二隻の艦の外には、何物も目に止らない。

文章や詩には白帆だの歸雁だの、浮鷗だのと種々の景物が列むで居るが、此の樣に洋々たる大海に來て見ると、さう云ふ類のものは唯の一つも見ることが出來ないのだ。

上白下黑の夏服姿　大洋上の壯觀

二十九日＝今日から上白下黑の夏服姿となつた、麥藁帽も許された、日本の内地ではもう綿入でなくては過されない頃だ、暑氣ますます激しく、午後三時頃左舷に近く夥しい鰹の群遊するのを見た、今夜は六時三十分から探照燈が點いたが、之が亦大洋上の一大壯觀なのだ、六時三十分いよ〳〵熱帶圏の客となり、折からの驟雨に涼氣を生じ、ホット一息吐いたのである。

十二月一日＝最早や十二月になつた、故國では餘程寒氣も烈しくなつたらうが、南へ南へと向ふ吾等は、日毎に熱さを感ずるばかり、日蔭でさへ溫度八十二度、日向へでも出やうものなら、夫れこそ大變で、海氣蒸すが如く、汗は雨を成すの有樣である。

ガム島

去る程に吾等は、横須賀軍港を出發してから、幸にして日和頗る宜しく、大した暴風雨にも出逢はず、潮の加減も順調であるから、之ならば二日の夜半にはガム島に達することが出來やう、併し夜半の入港は萬事に不便が多いと云ふので、明日午後三時の入港に決定された。

遠洋航海の趣味

三更の夜半に上甲板に出で見ると、渺漫たる大洋は、萬里際涯なく、月は中天に懸りて玲瓏たる笑みを湛え、清風徐に吹き過ぐれば、白雲舞ひ波浪歌ふと云ふ有樣で、此の種の趣味は、遠洋航海の人でなければ、決して味ふことが出來ないものだ、

二日＝土曜日午前十時三四十分の頃に、ガム島のリテシアン鼻を左舷艦首に認めた、はじめは地平線に接して、茫漠として明に見えなかつたが、次第に接近して、正横に見るに及び、島嶼の北端には、巖石が岨ちて天然の堡壘の

アプラ港

如く、亭々たる樹木が生ひ茂り、夫より南には山嶽の起伏することも知れた、仍て午後二時半アプラ港に向ひ、三時半第一浮標に投錨した、横須賀を距ること航程實に千百哩である。

すると間もなくガム政廳の訪問使として、米國海軍中尉がやつて來た、四時少し過ぐる頃には、劍山丸が入港した、此の汽船は我が練習艦隊に石炭を供給する目的で、スバ島まで吾等に隨行する命を受け門司からやつて來たのだ、アプラ港内には清水商會の虎丸を合せて、都合四隻の船が居るばかりだが、何れも日章國旗を飜して居るので、恰も身は神州の領土内にある如き感がした。

日章國旗

マゼラン

一體此のガム島は、マリアナ群島中の最南に位置を占むるので、千五百二十一年に有名なるマゼランの手に發見せられたのであるが、米西戰爭の結果、西班牙の手を離れて、米領となつた、島の大きさは、丁度我が國の淡路島程である。

三日＝八時半我が加藤司令官は、中島阿蘇艦長、平岡宗谷艦長と共に、島司サリスブレーを、首府アカニアに、訪問する爲めに上陸せられ、候補生や兵員も八時から半舷上陸を許された、見渡す所灣内には、所々に珊瑚礁が散在して、航路を掘り下げたと聞いたが、夫れでも水が淺くて、端艇を行るのに非常の不便を感じた。

半舷上陸

牛車

さて海上三十分ばかりにて、ビフと云ふ村落へ上陸したが、こゝは人口僅に二百ばかり、北方六哩の首府アカニア迄は、車馬の便がある、最も之は牛車で一人半弗を與ふれば、五十分ばかりで達する、馭者は十二三歳の少年で、多くは無蓋のみすぼらしい小車を牛が牽く、一車三人乘で、一鞭を加ふると共に牛は馬に負けぬ大力を出して、ドン〳〵走る有樣など、一寸他では見られぬ圖であらうと思はれた。

車上から村の樣子を見るに、兩側には椰子の樹の間に、土人の家が立ち幷び牛・豚・鷄の如き家畜が盛に飼養されてある、間もなく村落を出離れると、兩側はたゞ椰子の並木ばかりで、大きいのは約五丈程の長さで、而も青い大きな實が成つて居る、已にして道は谷合に入り、海岸に出でゝ、凡そ四哩も來た

椰子の並木

かと思ふ頃、前面を疾走する一臺の馬車があるので、馭者の少年に手眞似で以て、『あの馬車を拔け！』と命ずると、少年は肯きながら、强く一鞭を牛の脊に加へると、牛は跳ね上つて飛びながら進み、此方の車を馬車の輪に引かけた。から堪らない。索具は斷れて轉覆しさうになつた、所が其の破損は急に修繕が出來ないので、もう仕方がない、いよ〳〵膝栗毛に鞭打ちて、汗だく〳〵でアカニアまで達した。

膝栗毛

さて此處は、人口凡そ六千の都會で、土人の家と米人の家とが、雜然として並むで居る、土人の家は地上から三尺乃至五尺程の柱を建てゝ其の上に家を造り板床板壁で、表面は石灰を以て白く塗り、屋根は椰子の葉で葺いてある、又二尺四方位の窓があるが、之は家の大小によつて、二個のもあり五個のもある。

土人の業

土人は主として農業を營むで居るが、何しろ天然の產物が多く、殊更に耕耘に勉めないでも、思ふ存分の收穫があるので、住民は一般に甚だ怠慢で、隨つて貯蓄制度もなく、日用品飲食物までも、海外に仰ぐと云ふ有樣、椰子の實の採集位して、其の日を送るものが少くない。

酋長の子

曾て十七世紀の末頃に、此の島へ布敎に來た一人の僧侶があつたが、先づ酋長の、子に洗禮を受けさせやうと思つて、之を河畔に連れ行き、いよ〳〵儀式を始めると、あまりの不思議さに、酋長の子は、大聲あげてワイ〳〵泣き出した。

アギナルドの殘黨

すると家の中に居て、此の物音を聞きつけた父の酋長は、さては我が子の一大事であると、急いで家を飛び出して、たゞ一刀の下に、かの僧侶を斬り殺して仕舞つたと云ふ、野蠻な物語が今も殘つて居る。

なた有名なる比律賓獨立軍の大將アギナルドの殘黨が、約四百人ばかり米軍に捕へられて、此のガム島の牢獄に繫がれたが、彼等は一夜相謀りて、脫獄を企て、闇に乘じて逃げ去らうとした。

かくと見た番兵共の驚きは一方ならず、獄の內外に論なく、人影を見れば直に銃殺し、猶も萬一を慮つて、獄舍の窓より彈丸を亂射したから堪らない、或者は傷つき、或者は死し、或は床上に臥し、地に潛り込み、或は又壁に倚りて

首魁は礫殺

銃口を避け、辛うじて生き殘りたるものは、半數にも充たぬ百五十人の者であつたが、是等は其の翌朝になつて、一人も漏れなく縛り上げられ、海岸の岩石に繫がれて、身動きさへ出來ないので、唯號泣すること二日に及び、其の首魁と認むる者は、遂に礫殺されて仕舞つたと云ふ。

十二月九日＝午前六時アプラ灣を出で、フイジイ島のスバへと向つた、航程凡そ三千哩、日を閲すること十五、暑熱は日毎に增すばかり、昨夕刻に際してガム島在住の我が同胞の重なる人々十數名が、船を艤して告別に來た、折から夕陽は、地平線下に沒しやうとして、我が艦にては君が代の奏樂裡に、軍艦旗を下し終つたが、彼等は帝國海軍の萬歳を唱へて、嬉しげに別れ去つた。

日本民族の發展

あゝ我が旭旗の飜へる所、民族の發展は之に伴はなければならぬ、ガム島の如きも、土地としては頗る小さいけれども、猶開拓すべき多くの物がある、我が健氣なる同胞よ、南に往け〳〵、汝の手腕に待つべき所は決して少くはないのである。

十一日＝目に見ゆるものとては、五彩の雲美しき空の下、濃碧を湛ゆる海

眞水五合

一滴の水も貴重

僚友

に吾等の阿蘇と宗谷との二艦が、雄姿堂々として、進み行くばかり、いざ吾等は少しく艦内兵員の有樣を物語らうか。

兵員の洗面用としては、各自眞水五合ばかりを、桝に量つて分與せらるゝばかりであるから、若しも西洋手拭の如きものを、使用せむか、夫れこそ一滴も餘さず吸ひ取られてしまふであらう。

艦内にて水の貴重なることは、殆ど陸上の人の夢想だも及ばぬ所で、殊に長途の航海に於ては、海水を蒸餾して使用するの外は、全く之を得る方法がないから、假令一滴と雖、決して無駄に使用することは出來ぬ。

されば被服洗濯の如きも、極めて少量の水を以てしなければならぬが、兵員も追々之に慣れて、水の經濟は頗るよく行はれて居る。

午後機關兵三名が、日射病に罹つた、殊に越後四等機關兵は最も重態である、彼は搬炭員として、溫度九十四度の所に勤務して居たが、遂に此の恐るべき病魔に取つかれ、親切な僚友に伴はれて、病室へやつて來た。

彼の病狀は最初非常の興奮狀態で、四肢も痙攣したが、後には强直狀態と

なり、體溫四十二度に昇つた、軍醫官は百方其の治療に力め、或は通風を計り、或は冷水灌漑法を施し、食鹽水注射を行つたけれども、沈衰と痙攣と交も至り、心力呼吸刻々衰へて、艦内は俄に憂色に包まれた。

十三日朝一時十分彼は遂に世を去つた、柩を上甲板に置き、幕を張り造花を供へ、皆々燒香して手厚く弔つた。彼は秋田縣能代の人で、年僅に十七、故國を距る數千浬の太平洋上に、水漬く屍となならうとは、勿論思ひ及ばなかつたであらう、彼が故國の父兄の心裡を思へば、一掬同情の涙を禁じ得ないのである。

水漬く屍

さて本艦にては、艦長以下相謀りて故人を弔ひ、遺族を慰藉する爲めに、義捐金を募り、僚艦宗谷に於ても、同樣の擧があつた、此の日夕刻から遊戯を許されたけれども、鳴物は禁止であつた。

無線電信の弔詞

十四日＝午前六時半解隊して、宗谷と著しく距り、九時より越後四等水兵の葬儀を施行した、即ち先づ柩を後甲板に移し、故人の小照を飾り、司令官以下の香奠を供へ、造花二籠を捧げた、時に宗谷艦長よりは、無線電信によりて弔詞を申し來られた、岡本機關大尉は祭主として弔文を朗讀せられ、加藤司令官以下高等官、候補生準士官、及下士卒各部の代表者の燒香があり、兩艦は半旗の禮を行つた。

夫れより艦の進行を止め、ビンネース・タビットに釣して柩を下し、衞兵隊の弔銃と共に、軍樂隊は『命を捨てゝ』の樂を奏した、かくて總員最敬禮の下に、柩は徐に水中に沒してしまつた。

柩は水へ

式後艦長は、總員を集めて、故人の病狀經過を告げ、萬難に屈せぬ體力を養成して、一朝有事の日に備へよとの訓示があつた、午後は大掃除、明日はいよいよ赤道を通過するので、赤道祭をしなければならぬ。

海豚の大群

十五日＝十一時頃左舷艦首に當りて、海豚の大群が高く背を現はし、列を作つて白波を蹴立て、さも勇しく行進しつゝ、吾等を赤道に案内する樣に思はれた。

茲に於て吾等は、午食を濟すと共に、赤道祭の諸準備に着手した、正三時と云ふに赤道の神は前檣より御降下になる、打ち見渡せば赤の垂直の金剛杖

赤道の神

を持ち、一本齒の高足駄を履き、艦の動搖につれて、よろ〳〵として危げに見ゆる、赤道の神は頰赤く鼻高く、宛然鞍馬山の天狗が、神通力を失つて、こゝに天降つた如く、二人の雷神をさへ從へて居る。

赤道突破の鍵

此の時軍樂隊は賑かなる軍艦マーチを奏して、之を歡迎した、神は群集の間を通過しつゝ、後甲板へと向つた之に引續きて、異形奇態の假裝行列が、ゾロ〳〵とついて行く、やがて赤道の神は、司令官の前に來て、辨慶が勸進帳を讀むべき樣な身振りをして、歡迎の辭を朗讀し、終りに赤道突破の大鍵を渡し『行け！』と大喝一聲した。

すると司令官は、御降臨の勞を謝し、御親類の暴風の神や炎熱惡疫の神などは、最早や澤山だから御免を蒙り度いとお賴みすると、赤道の神は快く、よし〳〵！と肯き給ふのである。

こゝで赤道の神の發聲によりて、陛下の萬歲を三唱し、群衆も亦之に和して、艦內に轟き渡つたが、此の時正に三時十五分、實に赤道直下通過の時である。

赤き線

海面を見渡すに、風なく浪もなく、ゆらりゆらりとうねりの來るばかりで、疊を布いた如き大海原に、赤き線が見ゆるなどと、面白半分に打ち騷ぐ人さへある、行列は艦內を一週して後、赤道の神と共に、一同紀念の撮影をした、此の時左舷艦首に當りて、遠く雲低く垂れ、雨降り出して、猛烈なる龍卷の如きものさへ見えた、之ぞ赤道神の上天と思はれる、かくて四時半司令官はじめ下士卒に至る迄、總員上甲板で食事をして、下士卒は赤飯の御馳走に、日本酒と氷の分配を受け、中里副長の發聲で祝賀三唱、食事に次いで杯を擧げ、候補生ばかりはサイダーに乾杯したのである。

サイダーの乾杯

十六日＝朝九時驟雨が來た、總員身體を洗はむと思つて、上甲板に出たけれども、雨量が思はしくないので、裸體のまゝに體操をやつて待つたけれども、雨は遂に來なかつた、十七日の午前八時頃にも、又驟雨がやつて來たから、例の如く裸體になつて、甲板上に出たが、何しろ風は暗雲を送ること頗る急に雨は横樣に吹きつけ來りて、豆を打つ如く痛しとも痛い。

夜に入りて風强く、波濤は舷側に碎けて、頻りに飛散する樣は壯絶である

が、其の割合に艦は動搖しないのである。

十八日＝風甚だ強く、殊に午後に入りてよりは、艦體の動搖やゝ烈しく、怒濤の飛沫は折々上甲板迄をも見舞ふ、夕刻に至りて、燕の如き形の小鳥が、多數群をなして艦側に飛んで來た、此の鳥は全身黑く、中には頭の白いのもある、波上に浮ひで波を枕にしやうと思ふらしきも、怒れる波は容易に之を許さないのでドン〳〵艦内へ入つて來る。

波を枕の小鳥

平生無人島ばかりに棲んで居るのか、捕へられても少しも人を恐れず、甚しきはさし出した手の上に來て、悠然と其の翼を休むるものさへあつた、かくて午後四時頃から、荒天準備を行ふことゝなつた、即ら救助艇を艦内に入れ、移動しやすき物は、充分に結束して固定させ、無線電信の垂直線を下して、輕便なる物に更め、甲板上には命綱を張るのであつた。

荒天準備

雨か風か、來たらば來れ、しかも艦を打ち越ゆる巨濤のために、甲板は流した如くによく洗はれ、やゝ物凄き光景とはなつた、見よ候補生は、芋蟲の如くに搖られた釣床を下さんために、昇口に奔走すれば、艦體は急に傾きて足をさらはれ、ころ〳〵と辷り轉ぶさまは寧ろ滑稽と云はうか、泣顏して彼等の起き上らうとする時には、待つて居たと云はぬばかりに打ち込む大浪、全身ぬれ鼠の如くになりて而も施すべき策がない。

物凄き光景

さて我が後方から來る宗谷は如何と見やれば、同じく大濤に弄ばれて、一上一下或は右に傾き又は左に、艦首を波に打たれては、潮水は瀧の如くに落ち來り、高く傾く時は、赤き艦腹を惜し氣もなく現はすなど、時々刻々險惡の狀態に陷るのである。

已にして日は全く暮れて、後部の下甲板は通風惡く、次室と候補生室との釣床はこゝに設けられたが、何しろ通風が惡いので、全身の流汗甚しく、加ふるに糧食庫の米の臭氣さへ加はつて、更に安眠が出來ない、否夫ればかりか夜に入りても風濤益々烈しく、何れも不安の一夜を徹したのだ。

波濤の洗禮

恰も此の夜十一時の頃、特に大なる、一怒濤は、轟然として後甲板を呑み、第六ハッチから海水が打ち込んで、直下三丈の下甲板に落ち來り、恰も落雷の如き凄じい音を立てた、下に眠つて居た兵員は、何れも釣床に溺水を受けて

ズブ濡れとなり、或は頭を水中に沒した者さへある。

しかも甲板上の水は、艦の傾斜すると共に、或は流れ去り又は流れ來り、脛を洗ふばかりなので、バケツを以て汲み出す騷ぎは、一方ならぬ混雜である。

不安の一夜

十九日＝不安の一夜を明かしても、風は依然として吹き歇まず、浪はいよいよ荒れ狂ふばかり、且つ豪雨さへ加はつて、雨師風伯と海若とが、互に其の威力を競ふこととて、八千噸の大艦も、木の葉の如くに嬲弄され、殆ど手も足も出されない。

諸君試みに思ふても見られよ、際涯なき海上に、何の防禦物もなく、暗澹たる低雲は空を蔽ひ、斷雲の飛び行く有樣は、矢よりも早き所、巨濤舷側に中り碎けては、自然の大瀧と化して艦上を包み、展望僅かに二浬、四面糢糊として、たゞ悽然たる色を見るばかり、如何に海國男兒が立派な手腕を有つて居ても、かう云ふ大なる自然の偉力に對しては、最早や其の手腕を揮ふことが出來ない。

海國男兒の手腕

朝食にとて賄所で汁を作つたが、之も半分以上は既に釜の中で傾けられ、又此の殘り汁を分配された食卓では、配食の際に食器が滑つたり覆へつたりして中には一口も吸はなかつた者さへある、しかも夜に入るまで、風は尙暴威を逞しうするので、皆々仕事もせず、夜も同然の有樣であつた。（明治四十四年）

金剛を見ぬ記

金剛見學

大正二年十一月十日、木更津沖方面に催ほされた恆例觀艦式には、軍艦朝日に便乘して、大元帥陛下の御召艦香取に供奉するの光榮を得た、而して其壯嚴なる式の終つて後に、吾等は海國男兒の餘勇を振つて、新艦金剛の見學にと赴いた。

放波島

一體金剛は、此の日の式に列り、後更に横須賀軍港に回航したのであるが、元より艦體が大きいから、深く港内に投錨すること出來ず、港外放波島の附近に其の巨軀を横へて居る。

陛下が御還御になると同時に、妙に天氣の模樣がをかしく成つて、港内に

艦載水雷艇

も波が立ちはじめた、右に左に飛び廻つて居る艦載水雷艇や其の他の汽艇は、可なりの速力でありながら、兎角逆立ちをしたがつて、海に馴れぬ吾等には、時々手に汗を握らしめる。

『あれだからなア、隨分ひどく荒れ出したぞ』一人の海軍將校は、波に揉まれる汽艇を指しながら云つて居た。

『金剛見學の諸君は左舷から下りて下さい。此のまゝ停車場へ赴かるゝ方は右舷から！』と、朝日の副長が大きな聲をして、一同に注意を與へられた。

左舷の舷梯

最初の程は吾も〳〵と、中々志願者が多かつたが、俄に天候が荒模樣となつた爲めに、右舷から歸つた人も、意外に多かつたらしい、夫れでも見學の一行は、約二百人もあつたらうか。

波はだん〴〵高くなつて來る、天の一角には雪でも持つて來さうな雲が、怪しく湧いて出た。

吾等の乘るべき大形の汽艇は、幾度か左舷の舷梯に着けやうとして、しかも容易に着かない、どうしたのだらうと、多少心配しながら見て居る一刹那、

田中副長

大きな波がドーッと寄せて來て汽艇は其のはづみに、舷梯の一部に衝突したから堪らない、メリ〳〵ッ！と劇しい響が傳はつたかと思ふと、吾等の踏むべき梯子の下部は、千破萬破して、波に揉まれて居るではないか。

さア大變！金剛に赴くことは止さう。一體あの艦は何となく不吉なものだ、最初の田中副長が死むで、二度目の正木中佐も艦橋から落ちて大負傷をせられた。こんな高い波を凌いでまで行かずとも、横須賀まで來たら、いつでも見られる、今日に限つたことはない、ひどいめに逢つて歸つて、ソレ見ろ！と人に笑はれるのもあまりに見ッともよいものではない。こりや止めた方が勝らしいぞと、獨りで思つたものゝ、モー仕方がない。

金剛黨

右舷の連中は皆歸つてしまつて、殘るは何れも金剛黨！。

兎角する程に、辛うじて汽艇が横づけにされた、さア乘らうと云ふので、吾も〳〵と押し合ひへし合ふ、何れも紳士、政治家、海陸軍人の面々、意氣正に天を衝くの概がある。

金剛は何處に、と見れば遙かの港外に、いやに長たらしい軀を横にして、お

いで〳〵と待つて居る。

汽艇は秒時も休まず波に揉まれて居る、夫れに飛び乘るには、相當の工夫を要するので、若しも不用意にゆる〳〵移乘しやうとすれば、片方の足は屹度水に奪はれるのであらう。

吾々はどうかして、こんなへマな事がしたくはない、之でも海國男兒の片割れだ、ボートに移るとて、水に溺れたとあつては人聞きが惡い、さう思つて力任せに飛び込んだか、實は艇の底には、既に夥しい潮水が充ちて居たから、ビシャーン！。靴のしぶきは四方へ飛び散つて、近所の人の洋服を濡らしてしまつた。

『ヤッ！これは失禮をした。』

云つてる間も、艇は右に左に激しく動搖して寸時も立つて居られない、見學の連中は後から〳〵と、猶舷梯を降つて來る、夫れが汽艇に移乘する度に、屹度潮水を食はされる、午後三時頃、風はいよ〳〵狂暴を極めて、港内には小舟の影も稀になつた。

羌中の潮水

禿頭老人

『待つた〳〵、モー一人だから――』

吾々の汽艇が、朝日の舷側を去らうとした時に、頭の禿げた老人が、シルクハットを抑へながら、顏の色を變へてやつて來たが、此の人を最後として艇はいよ〳〵冒險界裡に入るのである。

朝日の別れ

オ、なつかしき朝日よ！吾等をのせて木更津沖まで運び、又此の港まで送り屆け呉れた朝日よ、吾等が今日汝の顏をはじめて見た時は東の海から朝日きら〳〵と輝き初むる頃であつた、所が今は日もはや、西の空に高く、寒い風も吹き募つて來た、吾等は今汝に別るゝことが、つらいのである、淋しいのである。

石炭の粉

吾等の一行は約二百人もあつたらうか、眞鍮色の太い長い煙突が、艇の中央部からたゞ一本、ヌッと突き出して居て、そこからは絶えず薄黑い煙を吐いてるのだが、風が強いからドン〳〵吹き拂はれて、たゞたまに風下に居る吾々の顏へ、バラ〳〵と石炭の粉をふりかけて呉れる。

此の煙突を境にして前部にも後部にも、殆ど隙間もなく人が立つて居る、

四ン這の醜體

被害の度

ステッキを杖ついたり、洋傘を力にして、體の重心を保つに苦心するのが、自然の偉力にはどうしても勝たれない。大きな波が來て、思ひきり艇の動搖する時には、ヨロ〳〵と右に倒れかゝたり、左にこけさうになる、中には船底に手をついて四ン這の醜體を演ずる者もある。

けれども流石に海國日本の人だ、誰一人として弱い音を吐く者もない、何れも勇むで金剛は未だか、金剛は未だかと待つて居る。

何しろ波に逆つて進むのだから、いくら汽力を加へた所で、さう思ふやうには進まれない、

『アッ冷い！とう〳〵やられたッ！』

『僕もだ、ア、口の中がからい〳〵。これぢやア迚も我慢がしきれない。』

前部の人々はどうだか知れぬ、後部に居る吾々も、被害の度は刻々に加はつて來る、とう〳〵やられたと云ふたのは、新調のフロックコートに瀧の如き潮水を浴びた人、口の中が鹹いと云ふのは、思ひきり潮水が顏へ中つたから、いや應なしに口中へ吸ひ込むで苦む人、當時一艇の慘狀は、正に言語に絶すとでも云はうか、夫れでも一人として不平を云つたり、弱い音を吐いたりする者がない、たゞ無意識に、

『チトお手柔かに願ひますぜ。』

と叫むだ者があつたが、夫れは波に對つて云つたのか、風に對つて賴むだのか。

陸軍の一軍人は、最も高い所にあぐらをかいて居た、煙突との脊くらべだから、波のあたる心配はないだらうが、風は激しかつたであらう。

こんな調子で、ものゝ三十分も經たらうか、さて一體吾等の目ざす金剛は何處と、人の背と肩との間から、ソッと顏を出して見ると、これは意外、まだ〳〵遠い所に居るではないか。

『オヤ〳〵金剛はまだあんな遠方に居る、これぢや何時行かれるか知れないぞ。』

かう云ふと皆が少し的が外づれた樣に、

『さア困つた、僕は今日は來るのでなかつたのに……』

ソロ〳〵弱音がはじまつた。

『海國男兒ぢや、波よ高くやつて來い、風よ大きく吹いて來い、』

血氣のものはかう叫むだ。

けれども又老人連は、聊か心細くもなつたのであらう。

『歸らうぢやないか、此の樣子ぢやどうなるかも知れない。無理をして行くよりも引き返した方がましだ。』

引返せ

『第一、人を多く乘せ過ぎたのだ、何ぼ波が高いからと云つて、人が少なければよいに、これぢやアやりきれません。なぜ二杯にしなかつたんらだう。』

言つてる間にも、船はいよ〳〵グラ〳〵して、どうやら轉覆の時期が迫つて來さうなので、老人連はもう堪らなくなつた。

轉覆の時期

『イヤ死んだら一緒です、一人ではありません、行く所まで行きませう。』

と泣聲も聊か交りかけた。

又、一方では血氣黨が、

『ソレ〳〵彼方から大きな奴が來たぞ、ホラホラ〳〵〳〵ボチヤーン。』

『動いちやいけない〳〵、今動くと轉覆してしまふ。』

『誰も動きたかアないんだが、ひとりで動くんだから仕樣がない。』

『又來た〳〵。大きいぞ、かぶる〳〵ボチヤーン、ソラ瀧だ瀧だ。』

船中はもう大變な騷きである、金剛は知らぬ顏に、悠然として錨地にかゝつて待つて居る。

こゝに何を入れるものか、艇の後部には、一つの巖丈な木箱があつて、其の上に荒繩が、大蛇のとぐろを卷いた樣に置いてある、成るべく動かぬ樣に立つて居やうとしても、どうしても重心を保つことが出來ず、自然に彼方へグラグラ、此方へヨロ〳〵するから、誰が云ふともなく、例の木箱を後生大事と抱へ込んで、萬一轉覆しても、箱と共に浮いて居やうと思ふ者も、二人や三人ではなかつた。

所が此の箱に止つて居る者は、比較的體を安全に保つことが出來る所から、今度はまた其の人の肩に止つたり腕を持つたりして、いくらかの動搖を避けやうとする者さへ出來て來た。

命の網

二連装式の砲塔

吾等は都合よく其の箱の傍に居たが、人が大勢だから迚も傍へは寄られない。辛うじて荒縄を引張るさう云ふ中からも痩我慢を出して、

『これが本當の命の網だが何うして、太いんだもの、切れやァしない。』

と、調子付いてると、俄かに艇が前部の方から、深く波間に食ひ込んで、途端に木の箱までがズル〳〵ズル〳〵と動き出した。

『ワッ！來たぞ、ソレッ！』

そんな聲もした、縄ばかり持つて居た自分は拇指の皮の一部を剝がされたが、勿論其の後は痛くも何ともなかつた。或人は洋傘の柄をポキリと折つてしまつたし、友人の一人は夫れをくの字形にしてしまつた。

『見よ金剛は近づいたぞ、笑つたつて泣いたつて、もう此方のものだ、ソレ一息ぢや一息ぢや。』

誰云ふとなくさう云ふので、首さしのべて見ると果して金剛は、例の二連装式の砲塔に夕日を受けて、輝き渡つて居る。

巨大なる十四吋の主砲四門は、比較的角度を大きくして、ヌッと突き出し

超ド級艦

艦上の人

て居る何とも云ふことの出來ぬ壯觀！美觀！。

オ、十四吋よ、海國男兒よ！海の巨城よ。二萬七千噸の大艦、超ド級の新式艦、二三日前に英國から來た日本の軍艦！。

こんな事を吾等は思つて見た、併し波は一層高くなつて、こゝは東京灣のうちでさへ、此の樣だのに、外へ出たらどんなにひどからうなど、さう云ふ餘裕ある事を考へる隙があつた、夫れは今二三分の後には、吾々は金剛艦上の人となつて、悠々其甲板上を活歩し得ると思ふからだ。

金剛の舷側へ打ちよせる波は、實に物凄かつた、我が汽艇は幾度か彼の舷梯に接近しやうとして、幾度も失敗した、艦上からも力の限り援助をしたが、波のために全く盡くすべき手段がない、此の間約三分間。

我が汽艇の動搖……夫れに伴ふ混雜は、今や殆ど其の極に達した。

『そんなに無理をしてつけた所で、歸りには何うするつもりだい。』

『歸らう〳〵、迚も駄目だ、こゝ迄來て沈むなんざあ外聞がわるい。』

危く足を掠はれて、艇外に放り出されさうになつた者もある、靴に潮水が

眞劍の醜體

入つて、活動を殺がれたものもある、實際に此の二三分間の波は高かつた、ビクともせぬ大艦の甲板上から、吾々が蠢動する有樣を見たら、恐らく滑稽の極であつたに相違ない、けれども吾等は眞劍になつて醜體を演ずるの外なかつた、いくら泰然自若として居やうと思つても、波と風とが、吾等の小艇を思ひのまゝに嬲弄する、夫れにつれられて彼方此方と動かされる、陸上ならば兎も角も、板子一枚下は千尋那落の大洋中だけに、誰れしも多少の、恐怖は伴ふもの、深く咎むるには足るまい。

艇は如何にしても、舷側へ寄りつかない。折角はる〴〵苦心して來たのにさりとは餘りに情ない話だが、どうも致し方がない。

『歸らう！迚も駄目だ。』

恐怖の間

凛とした責任のある聲がさう云つた、艦上からも亦聲がかゝつた。

『折角でしたがお歸り下さい、萬一の事があつては困りますから……』

短兵急である汽艇はモー其の時既に、艦を去ること幾十間、吾等はかくして漸く恐怖の間から拔け出すことが出來た。

無事太平

『歸りは樂だなア、愉快だ〳〵。』

と盛んに氣焔があがる。金剛は放波島の陰から、ヌッと顏を出して、何だか吾等を嘲けつて居る樣だ。

波に逆つて進むは困難だが、今度は波に押されながら進むのだから、汽艇は矢よりも早く走るが、夫れで以て更に動搖を感ずるでもなく、亦波が打ち込んで、冷いの鹹いのと云ふ騷ぎも起らず、頗る無事太平である。

『ア、今日は面白かつた、金剛は見なかつたものゝ、話の種は十分に出來た。』

『お互に先づ大した醜體も見せずに濟んで、何より結構々々！。』

などゝ云つてる間に、艇はいつしか逸見埠頭に着いた。ソレ上陸だ！海でこそ多少弱い音を吹くものゝ、陸は此方の天下だと、踏む足さへも辷るやうに、之れから停車場へくり込んで、車中では亦一段と花が咲いたのである。

（大正二年）

海上の威力 完

大正三年十月三十日印刷
同　三年十一月　二日發行

定價壹圓貳拾錢

著者　木村小舟

發行兼印刷者　東京市神田區錦町三丁目三番地　小林慶

發行所　右同所（振替東京六〇六九番）　嵩山房

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

不許複製

大賣捌

東京　林六合館
同　東京堂
名古屋　川瀬書店
同　星野書店

名古屋　小澤百架堂
京都　若林書店
同　東枝律書房
大阪　三宅書店

大阪　前川合名會社
久留米　菊竹金文堂
長野　西澤書店
清國大連　大坂屋書店

木村小舟先生著

自然研究 校外生活

全一冊

木版寫眞版數十挿入

實價金八十五錢
郵送料金八錢

教育時論評　著者は曩に『自然研究五十三の日曜』を出して大に好評を博し、今又茲に學生をして自然研究の目的を達し、新に品性涵養の一要素たらしめんために本書を公にしたり。四月の卷の春風野を吹き周る時より解き起して、順次月を追ひ、翌三月の卷、花の世界に至りて完結せしむ。文章・畅にして辭句艶麗、春の自然景を繪きては、胡蝶の翅に載せられて遠き彼方の霞に入りたらんが如く、池畔の趣味を汲んでは綠樹影を酬して魚木に登らんか、幽溪宛然咽ぶが如く、正に之れ人環を離れし一仙鄉に遊かれ、夏の濱邊に遊びては、漾々たる海波千里涯なく、夕べ北洋の氷山に　れる冷風は朝に磯濱の松が枝に音づれ、昨日南洋の潮は今汀上の白砂を洗ふ、常に風潮を侶とし又熱境の炎塵を見ず又新春の第一曙光を海洋に迎へては、燦然たる光輝に一年の希望を盟ふべく、雨後の春景に對ひては鳥雀庭樹に鳴いて空に纖雲をも止めず、一碧瑠璃を磨けるが如し、此の間に徘徊して動植物を初め有らゆる自然界の説明を興味深く悟り得らるべし、口繪及挿畫精美を極め卷末の附錄は本文を對照してまた面白し、眞に學生の校外生活に趣味深き研究を與ふべき最良書なり

嵩山房出版圖書畧目錄

著者	書名	種類	代價	郵税
飯田季治	神代物語	神代史	壹圓拾錢	八錢
文學博士松本愛重閲 飯田弟治譯述	新譯日本書紀	歴史	貳圓五拾錢	拾六錢
文學士 依田喜一郎	新選心學道話	修養	正續各五拾五錢	各六錢
千頭清臣	內外逸事譚	全	七拾錢	八錢
飯田弟治	譯文中朝事實	全	六拾五錢	六錢
農學博士横井時敬 小林星洲 柳田螟可	國民振興策	訓話	八拾錢	八錢
服部南郭	醉古堂劍掃（一名農民訓）	漢文	七拾錢	六錢
同	唐詩選詳解	漢詩	壹圓	八錢
高井蘭山 人	和漢朗詠集詳解	詩歌	七拾錢	六錢
	袖入り（ポケット）唐詩選講義	全	七拾五錢	八錢

志村烏嶺	増訂	千山萬岳	山岳紀行	壹圓八拾錢
大下藤次郎		水彩寫生旅行	水彩畫	貳圓五拾錢
黑田清輝 外諸先生		美術講話	美術	壹圓七拾五錢
岩村透		西洋美術史要	全	八拾五錢
黑田清輝 外諸先生		泰西名畫集	全	一輯七圓 二輯五圓六拾錢 各拾六錢
河合英忠		能樂スケッチ	全	七拾錢
印藤眞楯		油繪階梯	全	五拾錢
大槻鹿輔		スケッチの栞	全	參拾錢
和田英作 石島古城	校閲	彩畫法	全	參拾五錢
文學士 三輪德三		海陸發見史	地史	貳圓五拾錢
同 人		近世植民史	植民	壹圓八拾錢
文學士 青木武助	參考	國史綱	歷史	壹圓參拾錢

文學士 高桑駒吉 三輪德三	參考	西洋歷史	全	貳圓貳拾五錢
文學士 高桑駒吉 三輪德三	參考	東洋歷史	全	貳圓貳拾五錢
文學士 堀田璋左右	受驗參考	日本歷史	全	參拾錢
文學士 小原要逸	受驗參考	西洋歷史	全	四拾五錢
文學士 依田喜一郎 文學士 江崎誠	中學	日本史綱	全	上四拾錢 下五拾錢
同 人	中學	日本歷史	全	五拾錢
文學士 依田喜一郎	中學	西洋史綱	全	八拾五錢
文學士 物集高量		元龜天正	戰史	壹圓參拾錢
神谷道一		關ヶ原合戰圖志	戰史	七拾五錢
文學博士 大槻文彥		近古史談	史談	六拾錢
文學士 物集高量	挿釋	日本外史	歷史	八拾錢
高瀨羽皐		武田信玄	史傳	六拾錢

植田均	日本歷史繪物語	史談	五拾八錢	六錢
物集高量	諸家秘說 鑑刀集成	刀劍	壹圓五拾錢	拾貳錢
高瀨羽皐	新古刀劍談	全	八拾五錢	八錢
同人	英雄と佩刀	全	壹圓	八錢
八木奘三郎	考古精說	考古	壹圓六拾錢	拾貳錢
坪井博士閲 八木奘三郎	改版 日本考古學	全	貳圓	拾貳錢
八木冬嶺	考古の栞	全	參拾五錢	六錢
坪井博士閲 大野雲外 沼田頼輔	日本考古圖譜	全	壹圓七拾五錢	拾貳錢
大野雲外	先史考古圖譜	全	壹圓五拾錢	拾貳錢
鳥居龍藏 楠堂隱士	人種の研究	人類學	五拾錢	八錢
沼田頼輔	日本人種新論	全	七拾五錢	八錢

坪井博士閲 鳥居龍藏 大野雲外	人種地圖	全	二幅七圓	實費申受ク
同	人種誌	全	五拾錢	六錢
歷史地理研究會	西藏	地理	四拾五錢	六錢
奥村正雄	地界の現象	地文	八拾錢	八錢
大森俊次 小林呈八郎	大日本帝國全圖	折本地圖	貳圓參拾錢	拾貳錢
同人	同軸	全	參圓八拾錢	實費申受ク
物集高量	自然と趣味	文學的科學	六拾五錢	八錢
木村小舟	白然界一周	科學	壹圓參拾錢	拾貳錢
同人	美しき自然	全	壹圓	八錢
同人	五十三の日曜	自然研究 全	壹圓五拾錢	拾貳錢
同人	校外生活	全	九拾錢	八錢
同人	採集の栞	全	貳拾錢	四錢

秋山蓮・三	海の動物界	動物 全	四拾五錢	六錢
同人	哺乳動物	全	五拾錢	六錢
理學博士 白井光太郎	最近植物病理學	植物	貳圓貳拾五錢	拾貳錢
同人	救荒植物	全	參拾五錢	六錢
林學士 諸戸北郎	大日本有用樹木効用篇	全	壹圓五拾錢	拾貳錢
島谷敏郎	舶用蒸汽タービン機	機關學	壹圓五拾錢	八錢
前田庸一	實用船舶機關術	全	貳圓	拾貳錢
町田久敬	舶用蒸汽罐學	全	壹圓八拾錢	拾貳錢
馬場信倫	氣象學	氣象	貳圓六拾錢	拾貳錢
同人	海上氣象學	全	九拾五錢	八錢
大日本水産會	日本重要水産動植物圖	水産	四圓五拾錢	拾貳錢
同會	仝	全	五圓	拾六錢

（分刷書籍形）

同會	日本重要水産動植物圖解說	全	五拾錢	六錢
同人	日本産鯊一覽圖	全	四拾五錢	六錢
土居茂樹	普通水産製造書	全	壹圓拾錢	八錢
同人	水産講話	全	參拾八錢	四錢
美島龍夫	捕鯨新論	全	五拾錢	六錢
宇野三郎・淺野峰次郎	實業學校化學教科書	化學	四拾八錢	六錢
宇野三郎	最近商品學	商品學	八拾錢	八錢
森田熊太郎	會計と帳簿	計算	七拾五錢	八錢
森田會計調査所	獨修新式簿記講義	簿記	五拾錢	六錢
下野直太郎・廣岡山	最近商業簿記	全	壹圓	八錢
秋山行藏	商用簿記	全	六拾五錢	六錢
石川豐太郎・秋山行藏	現行官廳簿記法	全	八拾錢	八錢

著者	書名	冊數	定價	郵税
石川豊太郎 秋山行藏	新編 官廳簿記例題	簿記	參拾五錢	六錢
土谷温齊	會社簿記	全	六拾錢	六錢
大谷登喜雄	改訂 銀行簿記	全	七拾錢	八錢
普通簿記學會	實驗簿記學	全	參拾五錢	六錢
大谷登喜雄	家計簿記	全	參拾五錢	六錢
簿記學會	簿記用習字本	全	拾錢	貳錢
同會	練習用 日記帳	全	拾五錢	四錢
同會	練習用 元帳	全	貳拾錢	四錢
エービークラーク 横山喬松	英文 大久保彦左衛門	英文	四拾五錢	近刊
花輪虎太郎	女子 英語讀本	全	卷一 參拾錢	四錢
同人	女子 英語讀本	全	卷二 四拾錢	四錢
同人	女子 英語讀本	全	卷三 四拾五錢	四錢

著者	書名	冊數	定價	郵税
同人	女子 英語讀本	全	卷四 五拾錢	六錢
同人	英語難句讀本	全	一、二、各 參拾五錢	四錢
同人	英語受驗準備	全	五拾錢	六錢
小見忠雄	最近 商業英作文	全	壹圓五拾錢	八錢
嵩山房編輯所	キングス、イングリッシュ、リーダー	全	四拾錢	四錢
フランク、テー、ブーコック 小見忠雄	ストリーズ、オブゼ、シー	全	全三冊 各四拾五錢	各六錢
同人	セレクテッドストーリー	全	全二冊 各五十錢	各六錢
神學博士ジェームスレッゲ 文學士 依田喜一郎	漢英對譯 大學及中庸	經書	參拾五錢	四錢
同人	漢英對譯 論語	全	上下各 四拾錢	上下各 四錢
同人	漢英對譯 孟子	全	上下各 六拾錢	上下各 六錢
小林星洲	ポケット大學及中庸	全	五拾錢	貳錢
同人	ポケット論語	全	貳拾錢	貳錢

小林星洲	ポケット孟子	經書 全	參拾五錢	四錢
同人	ポケット四書	全	七拾錢	八錢
松本豐多	論語解	全 特價	五拾五錢	六錢
同人	孟子解	全	七拾錢	各八錢
同人	四書辨安	全	參拾錢 特價	八錢
橘千蔭	霜月帖	習字帖	參拾五錢	四錢
文學士 種田豐藏	筆のはな	全	參拾五錢	四錢
甫守謹吾	新女禮式	禮式	六拾五錢	八錢
矢野龍溪	理想の婦人	訓話	五拾五錢	六錢
石井泰次郎	婚禮千代かゞみ	禮式	六拾五錢	八錢
鈴木米次郎	音樂理論 新篇	音樂	參拾錢	六錢
白井規矩郎	教育的體操と遊戲	體操遊戲	壹圓	八錢

工學士 青山與一	鐵道車輛 各部名稱鑑	鐵道	參圓	貳拾錢
法學士 高田元次郎	和、英、米、佛對譯 鐵道用語類集	全	壹圓	八錢
八木奘三郎	偉人と修養	修養	九拾五錢	八錢
後藤新平男序 立石駒吉	座談法	全	四拾錢	四錢
大町桂月序 松田春雪	近世 祝辭弔祭文例	作文	參拾五錢	六錢
大野雲外	模樣のくら	太古模樣	五拾錢	六錢
巖谷小波	お伽六題	お伽噺	六拾錢	六錢
萩野萬之助	外遊三年	文學	參拾五錢 特價	六錢
高橋五郎	靈怪の研究	哲學	八拾錢	八錢
石崎篁園	實踐 雄辯學	辯論	四拾五錢	六錢
田口勝	栽培秘訣 園藝用	園藝	七拾錢	八錢
長鹽二水	唐宋聯珠詩格講話	漢詩	上卷 六拾五錢	近刊

乃木將軍が皇太子殿下に御訓言と共に棒呈せる『中朝事實』は實に斯の如き教典である

山鹿素行先生著　乃木將軍眞蹟入り　新譯日本書記著者　飯田弟治先生譯

譯文中朝事實

▲中朝事實は素行先生が我が國體を論述し、文物の煥乎たる武德の赫乎たる以て天壤に比すべく宇内に其比を見ざるを嘆稱し、雄渾の筆を呵して綴られたる一大熱誠より成れる言論なり

▲本書は乃木將軍の印行本によりて之れを普通文に譯述し且つ傍訓を施したるものにして、書中の圈點は實に將軍の手書に本づけるものなり

▲大正元年九月十三日乃木將軍痛烈の擧あり至誠神を感ぜしむ、其感化蓋し測り知られざるものあらむ、是に於てか本書を上梓して大正青年に奬む、精讀玩味して皇道の眞髓を究め武士道の本意を明らかにせば、亦以て現下沈淪せる懦氣を一掃するに庶幾からむ

附錄跋文入り

箱入全一冊
定價六十五錢
送本料八錢

356
2

終